

おほえや人のふねまぢかねつ  
さよなみのとかのおほわたよとむとも  
むかしの人にまたも逢はめやも

石見の國より妻に別れ上り來りし時の歌

全 人

石見の海 角の浦まを うらなとと 人こそ見らめ  
瀉なとと 人こそ見らめ よとゑやと 浦はなげとも  
よとゑやと 瀉はなげとも いさなとり 海邊をさして  
にきたつの 荒磯の上お かあをなる 玉藻おきつも  
朝はふる 風こそ寄らめ 夕はふる 浪こそ來よれ  
浪のむた かよりかくより 玉藻なす 宿ねと妹を

露霜の 置いて來れば 此道の 八十隈をとり  
よろづたび 顧みすれば 彌遠に 里はさのりぬ  
益たかに 山も越え來ぬ 夏草の 思ひとえて  
忍ぶらん 妹が門見ん なびけ此山

反歌

石見のや高つの山の木の間より

わがふる袖を妹見つらんか  
笹の葉はみやまもさやにさわげとも  
我れは妹思ふわかれ來ぬれば

高市皇子尊城上殯宮の時作りし歌 全 人

掛け卷くも忌々しきかも いはまくも綾に畏しきま



飛鳥の	まがみの原に	久方の	天つ御門を
かしくくも	定め給ひて	神さぶと	磐隠れます
八隅と	吾か大王の	きこしめす	そともの國の
まきたづ	不破山越えて	こまつるぎ	わさみが原の
かり宮に	あもりいまして	天の下	治め給ひと
をすくにを	定め給ふと	鳥か鳴く	吾妻の國の
御軍士を	めと給ひて	千早振る	人を和はせと
まつろはぬ	國を治めと	皇子ながら	まけたまへば
大御身に	大刀とりおぼと	大御手は	弓とりもたし
御軍士を	あともひ給ひ	とよのふる	鼓の音は
いかづちの	聲と聞くまで	吹き響せる	くたのおとも
あたみたる	虎かほゆると	諸人の	おびゆるまでに

さしけたる	幡のなびきは	冬籠り	春去り來れば
野毎に	つきてある火の	風のむた	なびける如く
取り持てる	ゆはぎのさわぎ	み雪降る	冬の林は
あらしかも	いまさわたると	おもふまで	聞きのかしくく
引放つ	箭の繁けけくて	大雪の	亂れて來たれ
まつろはず	立向ひとも	露霜の	消なばけぬべく
ゆく鳥の	あらそふはとに	渡會の	齊の宮ゆ
神風に	い吹き惑は志	天雲を	日の目も見せず
常闇に	覆ひ給ひて	定めてと	水穂の國を
神ながら	ふとしきまして	八隅知と	吾大王の
天の下	申し給へば	萬代に	然しもあるむと
木綿花の	榮ゆる時に	吾大王	皇子の御門を



神宮に	よそひ奉りて	遣はし	御門の人も
白妙の	麻衣著て	埴安の	御門の原に
赤根さす	日のくるよまで	鹿自物	いはひふとつ
烏玉の	ゆふべになれば	大殿を	ふりさけ見つ
鶉なす	いはひもとほり	さもらへ	さもらひかねて
春鳥の	さまよひぬれば	嘆きも	未だ過さぬに
憶ひも	未だ盡ねは	言さへ	百濟の原ゆ
神葬り	葬りいまして	朝もよ	木のべの宮を
常宮と	さためまつりて	神あがら	とづまりまして
然れども	吾大王の	萬代と	おもほしめして
作らし	かくやまの宮	萬代に	過さむと思へ
天のおと	ふりさけ見つ	玉手襟	かけてしぬむ

かしこかれども

短歌

ひさかたの天知らぬる君ゆゑよ  
 月日もしらふ戀ひわたるかも  
 埴安の池のつゝみのこもりぬの  
 ゆくへをしらふとねりはまどふ

神龜二年乙丑夏五月芳野離宮に幸せし時

の歌

笠 金村

足引の 御山もさやに おちたきつ 芳野の河の  
 河の瀬の きよたを見れば 上邊には 千鳥と鳴く



下邊には かはづつま呼ぶ もゝとまの 大宮人も  
をちこちよ 志ゞよとあれば 見る毎よ あやに乏しみ  
玉かつら 絶ゆる事なく 萬代に かくしもがもと  
天地の 神をぞ禱る 恐こかれども

反歌

萬代に見とも飽めやみよとぬの  
たぎつかふちのおそみやどころ  
人皆のいのちもわれもみよとぬの  
たきつとこはの常ならぬかも

不盡山を望むの歌

山部 赤人

天地の 別れとときゆ 神さびて 高く貴き  
駿河なる 富士の高根を 天のはら 振りさけ見れば  
わたる日の 陰もかくろひ 照る月の 光も見えき  
白雲も い行きはゞかり 時じくぞ 雪はふりける  
語りつき いひつき行かん 富士のたかねは

反歌

田子の浦ゆ打ち出でし見ればましろにぞ  
ふじのたかねよゆきは降りける

神龜元年甲子冬十月五日紀伊國に幸せし

時の歌

同

人

八隅知と わが大王の

常宮と

仕へ奉れる



さひがぬゆ そがひにみゆる 沖つ島 清き渚に  
風吹けば 白浪さわぎ 潮干れば 玉藻苅りつゝ  
神代より しかぞ尊き 玉津島山

反歌

沖つ島ありその玉藻はほひみち

い隠ろひなほおもほえんかも

和歌の浦に潮みちくればかたをなと

葦邊をさしてたづなきわたる

短歌四首

同

人

春の野にすみれつみにと來しわれぞ

野をなつかしき一夜ねにける

わかせこに見せんと思ひし梅の花

それとも見えす雪のふれしは

あすよりは若菜つまんとおもひ野に

きのふもけふも雪のふりつゝ

百濟野の萩のふるえに春まつと

すみしうぐひすなきにけんかも

故太政大臣藤原家の山池を詠みし歌 全 人

いにしへのふるき堤は年深み

池のなぎさにみくさおひけり

勝鹿眞間娘子の墓を過る時の歌 全 人



古に ありけん人の 倭文幡の 帯ときかへて  
 ふせや立て つま問ひしけん 勝鹿の 眞間のでなが  
 おくつきを こゝとは聞けさ まきの葉や 茂りたるらん  
 松か根や 遠く久しき 言のみも 名のみもわれは  
 忘れえなくに

反歌

われも見つ人にもつけん勝鹿の

眞間のでながおおくつきどころ

勝鹿の眞間のいりえにうちなびく

玉藻苅りけんてでなとおもほゆ

感情を反せしむる歌

山上憶良

或は人あり、父母を敬するを知らず。侍養を  
 忘れ妻子を顧ずして、脱履より輕じ、自、畏俗  
 先生と稱す。意氣青雲の上に揚ると雖も、身  
 體猶塵俗の中に在り。未だ修行得道の聖に  
 驗あらざ。蓋是山澤亡命の民なり。所以に三  
 綱を指示し、更に五教を開き、之に遺くるに  
 歌を以て其惑を反せしむ。歌に曰く

父母を 見れば尊し めこ見れば めぐうつくし  
 世の中は かくぞこととり もちどりの かゝらはしもよ  
 ゆくへ知らねば うけぐつを ぬぎつる如く  
 履みぬぎて 往くちふ人は 岩木より なりてし人か



ながなのらさね 天へ往かば 汝がまよく  
地ならバ 大王います この照す 日月の下は  
天雲の むかふす際み たにぐよの さわたる際み  
聞こし食す 國のまはらぞ かにかくに 欲とさまよく  
いかみはあらトか

反歌

久方のあまちは遠となほくくに

いへにかへりてなりをいまさるに

子等を思ふ歌

同

人

釋迦如來金口正説に、等く衆生を思ふこと  
羅喉羅の如くと、又説く愛は子に過くるな  
しと。至極の大聖尙子を愛する心あり。まじ

て世間の蒼生をや。誰かは子を愛せざるべ  
き。

瓜はめば こども思ほゆ 栗はめば まゝておぬバゆ  
いづくより 来りしものぞ 眼之間に もとなかよりて  
安寝おなさぬ

反歌

おろかねもこがもね珠も何せん  
に まされるたから子にわかめやも

貧窮問答の歌

同

人

風まどり 雨ふるよの 雨雑り 雪ふるよの  
術もなく 寒くいあれば 堅壚を 取りつゝしろひ



糟湯酒 打すゝろひて 志はぶかひ 鼻びじくりに  
 志かどあらぬ 髯かきなでよ あれをおきて  
 人はあらじと ほあろへと 寒くーあれバ  
 麻ぶます 引きかよふり 布かたぎぬ ありのことく  
 競へさも 寒きよすらを われよりも 貧らき人の  
 父母は 飢ゑ寒からん 妻子さもは こひてなくらん  
 この時は 如何にしつゝか 汝が代はわたる  
 あめつちは 廣らといへと あがためは 狭くやなりぬる  
 日月は 明らといへと あがためは 照りや給はぬ  
 人皆か 吾のみや志かる わくらバに ひとよはあるを  
 人なみに あれもなれるを 綿もなき 布かたぎぬの  
 みるのこと こよけさされる かゞふのみ 肩に打ち懸け

伏せいほの まけいほの内に ひた土に 藁とき敷きて  
 父母は 枕の方に 妻子さもは 足の方に  
 圍み居て 憂へさまよひ 竈には 煙ふきたてず  
 甑には 蜘蛛の巣かきて 飯炊しく 事も忘れて  
 ぬえ鳥の のぞよひをるよ いとのみきて 短きものを  
 端きると いへるが如く 志もとどる 五十戸長か聲は  
 ねやとまで きたちよばひぬ かくばかり すべなきものか  
 世の中の道

短歌

世の中をうととやさーと思へとも  
 とびたちかねつ鳥にーあらねは



秋野花を詠める

同

人

秋の野にさきたる花をおよび折り

かきかぞふればななくさの花

萩が花をさなくすはななせこの花

女郎花また藤袴あさがほのはな

梅花の歌(節略)

天平二年正月十三日帥老の宅に萃まる。宴  
會申るなり。時、初春令月。氣の淑に、風は和  
に、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫  
す。加之、曙には嶺雲を移し、松蘿を掛けて而  
して蓋を傾け、夕には岫霧を結び、鳥穀は對

して而して林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空に  
は故雁呷る。是に於て天は蓋ひ地に坐し、膝  
を促て觴を飛し、言を一室の裏に忘れ、衿を  
煙霞の外に開く。淡然として自放に快然と  
して自足る。若し翰苑に非きは、何を以て情  
を攄ん。請ふ落梅の篇を紀さん。古今夫れ何  
ぞ異なるべき。宜しく園梅を賦して聊か短詠  
を成すべし。

筑前守山上大夫

春されはまづ咲く宿の梅の花

ひとりみつゝやはるびくらさん

筑後守葛井大夫



梅の花いまさかりなりおもふさち

かさこよふてな今盛りなり

笠 沙 彌

青柳うめどのはなを折りかさこ

飲みての後は散りぬともよこ

主 人

わがそのよ梅の花ちるひさかたの

天より雪のなれくるかも

少監阿氏奥島

梅の花散らまく惜しむわがそのよ

たけの林にうぐひすなくも

大典史氏大原

うちなびく春の柳とわがやどの

うめの花とをいかにかわかん

大判事船氏磨

ひとことにをりかさこつくあそべども

いや珍らしきうめのはなかも

薬師帳氏福子

うめのはな咲きて散りなほ櫻花

つきて咲くべくなりよてあらずや

筑前介佐氏子首

萬代に年はきふともうめの花

たゆることなくさきわたるべし

壹岐守板氏安磨



春なればうべも咲きたる梅の花

きみをおもふとよいもねなくに

神司荒氏稻布

梅の花をりてかざせるもろ人は

今日のおひたは樂しくあるべし

薬師高氏義通

春さらばあはむともひし梅の花

けふのあそびにあひみつるかも

陰陽師礒氏法麿

梅の花たをりかざしてあそべども

あきたらぬひは今日にしありけり

竿師志氏大道

春の野になくや鶯なつけん

わがへの園に梅が花さく

筑前目田氏真人

春の野に霧たちわたりふる雪と

人の見るまで梅の花ちる

土師氏御通

梅の花をりかざしつゝもろびどの

あそぶを見れば都いそおもふ

小野氏淡理

かすみたつ永き春日をかざせれど

いやなつかしき梅のはなかも



亡妾を傷む歌

大伴家持

吾が宿に 花ぞ咲きたる ぞを見れど 心もゆかき  
 はじきや志 妹がありせば みかもなす 二人ならびる  
 手折りても 見せまじものを 空蟬の 借れる身なれば  
 露霜の 消ぬるが如く 足引の 山道を指して  
 入り日なす かくりよ志かば そこもふよ 胸こそ痛め  
 いひもかね なづけも志らよ 跡もなき 世の中なれば  
 せんすべもなす

反歌

時はしむいづもあらんを心いたく  
 いにしわきもか若子わかこをおきて

いせよゆく道知らせせばかねてより

妹をどゞめん關をおかまじを

妹か見しやどに花さくときはへぬ

わが赤く涙いまたひなくは

かくのこみありけるものを妹もわれも

千歳のおともたのみたりける

痛悼未だ熄まずして詠める歌 全

人

世の中し常かくのみとかつ知れど

いたきこころは忍びかねつも

佐保山にたなびくかすみ見るごとよ

妹を思ひでよなかね日はなす



むかしこそよそにも見しかわきもこが  
おくつきと思へばはらき佐保山

獨り幄裏に居て遙に霍公鳥の喧くを聞て

よめる

全 人

高御座

天の日繼と

すめろぎの 神のみことの

聞こし食す

國のまほらに

山をらも さはにおほと

百鳥の

來るて鳴く聲

春されば きよのかなしも

いづれをか

わきて忍はむ

卯の花の 咲く月立ては

珍らしく

鳴く霍公鳥

あやめぐさ 玉ぬくまぞに

ひるくらし

よわたしきけと

聞く毎に 心うこきて

うなげちき

あはれの鳥と

いはぬ時なし

反歌

ゆくへあくありわたるとも霍公鳥

なきらわたらはかくやあぬはん

卯の花の咲くにしなけばほととぎす

いやめづらしも名告りなくなへ

霍公鳥いとねたけくは橘の

はなちる時よきなきとよむる

雨の落りたるを賀して 全 人

わかほりー雨はふりきぬかくらあらは

言舉げせずともどーはさかえん



秋の歌

全

人

さをしかの朝たつ野邊の秋萩よ

たまとみるまでおける白露

短歌二首

浅茅原つばらくよものもへり

ふりよ志郷のおもほゆるかも

わすれ草わか紐につくかぐ山の

ふりよ志郷を忘れぬかため

短歌二首

われのみぞ君には戀ふるわかせこが

こふとふことい言のなぐさぞ

夏の野の若けこに咲ける姫百合の

あらえぬ戀はくるときものぞ

防人の別れを悲む心を痛む歌 大伴家持

大君の とほのまかとし 不知火 筑紫の國は

あたまもる おさへの城ぞと 聞こしをす 四方の國には

人さには みちてはあれさ 鳥か鳴く あづまをのこは

いで向ひ かへり見せずて 勇みたる 猛き軍士と

ねきたまひ まけのまにく たらちねの 母が目離れて



若草の

妻をよまかぢ

あらたまの

月日よみつゝ

あしが散る

難波のみ津に

大船よ

まがいにぬき

朝なぎよ

かことゝのへ

夕潮に

かぢひきをり

あともひて

漕ぎゆく君は

波の間を

いゆきさぐりみ

まささくも

早く至りて

大王の

みことのまはま

ますらをの

こゝろをもちて

ありめぐり

今年をはらば

つゝまはせ

販りきませと

いはひべを

とこべにすゑて

白妙の

袖折りかへし

ぬはたまの

黒髪とまて

長き毛を

まぢかもちひん

はらきつまらは

反歌

ますらをのゆぎとり負ひて出でいけば

わかれを惜しみなけきけんつま

とりが鳴く吾妻をとこのつまわかれ

悲しくありけん年のをながみ

旋頭歌

自嘆歌

元奥興僧

白珠は人にあらえを知らせともよし

あらせともわれしを知らずともよし

春日なる三笠の山に月もいでぬるも

さき山にさけるさくらははなの見ゆべく

白雪のとこく冬はすぎにけらしも

はるかすみたなびく野邊の鶯なきぬ



譬喩歌

はふりらがいとふやしろの紅葉も

ちめ繩こえてちるとふものを

富士山を詠める歌

よみ人あらず

なまよとの 甲斐の國

打よする 駿河の國と

こちこちの 國のみなかゆ

出立てる 富士の高嶺は

天雲も いゆきはゞかり

飛ぶ鳥と とびものほらず

ゆるる火を 雪もてけち

ふる雪を 火もてけちつゝ

いひもえず 名付もしらに

あやしくも います神かも

せの海と なづけてあるも

その山の つゝめる海を

ふじ河と 人のわたるも

その山の 水のたぎちぞ

日本の やまどの國の

鎮めとも いますかみかも

寶とも なる山かも

駿河なる 富士の高嶺は

見れどあかぬかも

反歌

ふじのねに降りおける雪はみなつきの

もちに消ぬれを其夜ふりける

ふじのねを高みかこみ天雲も

いゆきはゞかりたなびくものを

(高橋連蟲麻呂歌中に在り)

天皇高圓野に狩を給ふ時むさしびを得て



上れるに詠みてそへたる歌 大伴阪上郎女  
まきらそのたかまきやまにせめたれば  
さどにおりくるむさしびぞおれ

藤原宮にたてる民がよめる歌

八隅志し わか大王 高ひかる 日の皇子  
荒妙の 藤原かうへに 食を國を めし給はんと  
みあらかは たかしらさんと 神ながら 思はずなへに  
天地も よりてあれこそ いはゞこの 淡海の國の  
衣手の 田上山の まきさく ひのつまでを  
ものよふの 八十氏河に 玉藻なき 浮べ流せれ  
そを取ると さわく御民も 家忘れ みもたなうらき

鴨じもの 水に浮居て わかつくる 日の御門よ  
知らぬ國より こせぢより 我が國は 常世にならむ  
ふみおへる 怪しき龜も 新代と 泉の河に  
持ちこせる まきのつまでを もよたらず いかたに作り  
のほすらむ いそはく見れば 神ながらならむ

天武天皇

みよしのし みよかの嶺に 時なくぞ ゆきは降りける  
ひまなくぞ 雨は降りける 其の雪の 時なきがごと  
その雨の ひまなきが如く まもおちき  
思ひつゝぞ来る その山道を



吉野に幸し玉ひし時の御製 天武天皇

よき人のよしとよく見てよしといひし

吉野よく見よよきひとよくみつ

持統天皇

春すぎて夏きたるらと白妙の

ころもほしたり天のかぐやま

志貴王子

あしべゆく鴨のはかひに霜ふりて

さむき夕のやまととおもほゆ

寄花

讀人しらす

われこそは憎くもあらめわがやまの

はなたちほなを見よは來トとや

寄物陳思

劔太刀なのをしけくもわれいなと

このころの間のこひのまげきよ

寄物陳思

梓弓ひきてゆるべぬますらをや

戀とふものをまぬびかねてん



東歌三首

玉川よさらきてつくりさらけに

なにぞこのこのことたかならま

信濃あるそがのあらのに霍公鳥

なく聲きけはとまをぎにけり

遠江とほつゝまいなさはそえのみをつくれ

あれをたのめて淺まらものを

防人歌二首

おきていかば妹はまがなうもちてゆく

あづさの弓のゆづかにもがも

おくれゐてこひはくるとも朝獵の

君がゆえにもならまらものを



第三篇 平安朝の文學。

第一章 總論。

桓武天皇延暦三年に、八代七十餘年の間、君民共に住み馴れ  
し、奈良の都を山城國乙訓郡長岡に遷し給ひしが、十年を経  
て、其工事尙成らざりしかば、延暦十二年、重て全國葛野郡宇  
多村を相して、宮城を經營し、萬世不易の帝都と定め、平安城  
と名づけ給ひき。是れ實に延暦十三年、紀元千四百五十四年  
の事なり。是より、明治二年、今の都に遷り給ひしまで、千有餘  
年の間、帝都は此處に奠まりしかば、文治二年に、源賴朝が覇  
府を鎌倉に開きしより、大權武門の手より落ち、京都にましま  
す天子は、唯垂拱して成るを仰き給ふのとなりしかば、此書  
に於ても、普通の稱呼に従ひ、たゞ其以前を平安朝といふ



なり。されば、平安朝の文學とは、平安奠都の頃より、源平兩氏の時代まで、凡四百年間の文學を稱するなり。此文學は、國史の修撰といひ、漢文漢詩の流行といひ、また奈良朝の文學に繼ぎ、其將に執らんとせし方角に、進歩をたるものなれども、國文學の上より觀察して、大に價值あるものは、大抵新に此時代にあらはれたるものとす。物語、草子、日記、紀行等の散文の文學の如き即ち是れなり。和歌は星霜を経るに從ひ、漸々變遷して、遂には萬葉時代のものと比較すべき價值なきものとなりき。されども、尙是れ平安朝の特有なる一種の光彩を帯びたるものにして、特に一時は、或る點より觀察すれば、萬葉時代にも凌駕するばかり進みし事ありき。夫の推古天皇の時に始まりし隋唐との交通、及び佛教の東

漸が如何なる影響を、我國の文明、特にそれが文學の上と與へしかば、既に前に詳かにせり。其後漸く、唐風の行はるゝに從ひ、質樸粗野の風俗は變じて、華美艷麗となり、聖武天皇の御代より、佛法の益弘通せしと共、勇壯活潑の氣風は失せて、優柔懦弱となりぬ。此の人情風俗は、稍既に奈良の朝に於て見るべかりしが、平安の朝に至りては、一層甚しくなりたり。抑、我國の上代は、一般に風俗の高尙なりしは似ず、男女兩性の間には、別に嚴正なる規則も無かりしほど、高貴なる方々にても、賢明なる人々にても、此點に於ては、猥りがはつき舉動少からざりき。されども、當時は上下の風俗質樸にして、尙武の氣象熾なりしかば、さまでの弊害を見ざりしが、降りて唐風を摸して、浮華を尊び、佛法を信じて、無常を感じ



る時代に至りては、日本男子の勇壯なる氣風は、全く之がた  
めに消耗し、姿も心も女々しくなりて、遊惰の風漸く朝廷に  
盛んなるに従ひ、其弊害大に露はれ、夫の藤原氏が大權を恣  
にする頃に至りては、殆んど其極に達したり。蓋し此時に當  
りて、朝廷の顯要ある位置は、みま藤原氏の一族にて之を占  
め、全國の豐饒なる土地は、莊園として、多く彼等の爲めに領  
せられたりき。故に藤原氏は、歴代天子の外戚として、政權を  
掌握せしのみならず、又、大地主として、貨財にも不足なかり  
しかば、此時にこそとて、宏壯なる邸宅を構へ、盛大なる宴會  
を催して、豪華を競ひ、奢侈を鬪はす事常となり、身には綾羅  
錦繡を纏ひ、口には豪梁美味に飽き、翩々たる佳人才子、春の  
朝、秋の夕、花にたはむれ、月に嘯き、懇懃を通じ、花鳥の使を馳

せて、穴隙を鑽り、此世の外なる樂よ、世の害はるよも、民の苦  
ことなるをも顧みずして、此世をは樂しき夢の中に過ごし  
たり。また子孫の繁榮を希ひ、後生の安樂を求むる爲めに、代  
々莊嚴なる寺院を建てたりき。當時、朝廷の御慰みには、詩歌、  
管絃、蹴鞠、香、雙六等は常の事なり。此他、曲水の宴、紅葉の賀、四  
季折々の御遊の盛んなる、云ふばかりなり。かの競馬騎射の  
如きも、今ハ一の遊戯とのみなりたり。かくの如く、槐棘の地  
は、變じて歌舞の巷となり、花柳の境ともなる状態なりしか  
は、終には政權の、地方より移るを如何ともする能はざりき。  
而して、公卿百官の、かくも遊宴にのぞ耽る暇ありしかは、何故  
ぞ。蓋しかの唐風を摸して、我國の進歩に比べては、頭の大な  
るよ過きたる政府を設けられしかば、政務の割合に少かり



しにも由るべし。然れども、たとひ小なりと雖も、一帝國の政  
府なれば、事務なきに非ず。唯、浮華の空氣を呼吸して、游惰性  
を成したること久しければ、煩雜ある政務の如きは、多く下  
官に司らしめ、特に兵馬のことの如きは、最も其厭ふ所にし  
て、之を武人に委ねて顧みざりしかば、さてこそ、かく遊宴に  
のみ耽るの閑ありしなれ。

此の如く、藤原氏も、中葉以後に至りては、復、大奸を倒して其  
家を起し、鎌足の如き英傑なく、幼主を擁して政權を握り  
し、良房の如き智謀の人もなく、唯、一身の名利を謀り、目前の  
快樂を貪るが如き、凡庸の徒のみ多かりしかば、生れながら  
高位に居て、其門閥に誇り、實務を怠り、武官を輕じ、徒らに泰  
平無事を希ひたりしが、平安の地にこそは、歌舞管絃洋々の

樂溢るゝばかりなりしが、都を出づると、僅に一步なれ  
ば、宛も暗夜に夜會の席を出たでるが如く、されば、朱雀天皇  
の天慶年中に、平將門は東に、藤原純友は西に相叛きしも、藤  
原氏の力にては、撃ち平ぐるゝ能はず。諸國の武士の力によ  
りて、其乱漸く定まりたり。然れども、内には朝廷の紀綱次第  
に緩みて、圓融天皇の朝には、盜賊近畿を横行して火を放ち、  
人を殺ししかども、之を鎮むるゝ能はず。私に兵杖弓箭を帶  
ぶる者、多かりしも、亦之を禁するゝ能はず。外には諸國の武  
士、益、朝威を憚らず。或は、海賊の調庸を奪ふものあり、行路を  
妨ぐるものあれども、朝廷の力、勿論之を如何ともする能は  
ざりき。其後、後一條天皇の朝に、平忠常の反せる時と云ひ、前  
九年後三年の兩役といひ、孰れも皆然らざるは、おかりき。か



かる騷がしき世にありながら、上達部、殿上人は、毫も之を知らざるものゝ如く、詩歌管絃の遊宴に耽りて、春の日の暮るるも知らず。秋の夜の明くるも知らず。ありしはさなれば、唯淫猥の風のみ盛になりて、啻に形管の貽、芍藥の謔のとなりき。關白にして一時に二妻を娶りたるものもあれば、名媛にして同時に二夫に見えたるものもありしといふ。風俗の乱れたるを、推して知るべきなり。而して、これらの上達部、殿上人は、政治の爲めに精神を勞せず、衣食の爲めに手足を働かさざれば、民を憐むの心なくして、衆を驕るの情のみ。婦人に戯るゝ術と共に増長せり。而して、其智淺く、膽少にして、佛説に惑溺せるが故に、死を懼れ、生を希ふ心強く、病を恐るゝを甚しかりしを、聊にても、心身の不快あるときは、之を以

て物の怪、生靈などの祟りとおもひ、悪魔の仕業ならんと考ふるよりして、神職を招き、僧徒を集へて、加持祈禱を専らとしたり。されば、此際には祈禱の僧、修験者などの、極めて優待せられしほどに、折合悪むかりし神道と佛法とは相親和して、神佛一体、本地垂迹の説をさへなすにいたりぬ。惟ふに、これ一よの當時、最澄、空海の如き名僧智識の多くして、其説法の巧みなりしと、二つには、當時の公卿百官より學者に至るまで、概ね氣力なく、精神なくして、柔弱怯懦なるを、婦女子の如くなりしかば、神佛を識別するの力なくして、孰れも尊敬崇信すべきものと思ひたればなるべし。此風俗いよく盛んなるに隨ひ、朝廷の律令、いつしか行はれず。佛法ひとり國家の護法となりしかば、暴風洪水の如き天災地妖より、疫癘兵



寇に至るまで、經文を誦して避けんとを祈り、佛陀の勢力を乞ふより外に詮方なかりき。

此間にも、前には宇多天皇の菅原道眞を登用して藤原氏を抑へんとお給ひ、後に後三條天皇の大に政綱を張り給ひし類なきにあらすと雖も、孰れも其志を遂げ玉はぞ。又、貞觀(清)延喜(醍醐)天曆(上村)の如き泰平の治ありと雖も、是れ亦、流星が一時燦爛たる光りを發せるか如く、又、佛國路易十四世の治世の如く、要するに、浮華ならざるはなかりき。而して天下の人心は、かく朝廷に向はずして武家に皈せんとする折なるにも關せず、大宮人はたゞ私慾私情をのこ恣にして、人倫を忘れ、名分を失ひ、不潔卑劣の樂を極めしより、其結果は、一轉じて保元の亂を醸し、再轉じて平治の亂となりたり。保元

の亂の如きは、古人も云ひし如く、五倫五常を滅却せし大變亂なり。是れ、平安の朝を支配せし人情風俗が、其頂點に達したるを以て、さながら洪水の堤を破潰せしが如く、天下を濁亂せしものなる事明白なりとす。此あひたに、藤原氏敗れて、源平兩氏の争となり、源氏亦敗れて平氏獨り榮え、其所領は六十余州の半はに及び、平氏の族にあらざる者は、人に非ずといふ勢に乗じ、漸く倨傲の志を生じ、事々物々、盡く藤原氏の驕奢を學びしかば、廿年榮華の夢、忽ち源氏の軍に破られて、西海に没落し、天下の大權は、源家の握る所となりしき。平安の朝、四百年間の形勢は、略上に述べたるが如し。此間にあらはれし文學は如何なるものか、讀者の容易に想像し得る所ならん。蓋し文學の人心の射映なり。平安の朝の人心は、



艷麗優美なるを花の如く、又月の如し。然れども柔弱にして氣力なく、淫逸にして節操を缺く。さては此人心、文字にあらはれて、平安の朝の文學となり、其文學また翻りて人心を動かし、彼此相頼りて、四百年間の社會を左右したり。此時代はかくの如く、柔弱なり又淫逸なりと雖も、國文學の上より觀察すれば、極めて價值あるものにして、其散文、韻文ともに見るべき者多し。今從來の類別法によりて、之を分ち、左の六章に於て、順次に之を論せんとす。

第一 平假名の製作。

第二 物語、即ち小説の文。附消息文。

第三 日記、及び紀行の文。

第四 草子、即ち隨筆の文。

第五 歴史体の文。

第六 和歌、及び歌序。

今、之を述ふるに先ち、尙少しく、平安朝の漢學の狀態を示さざるべからず。蓋し、平安の朝は、國文學盛んなりしと雖も、漢學決して衰へたりしに非ず。朝廷の令達は勿論、歴史、法制等重なる著書は、皆漢文なりき。男子の往復文も、亦多くは漢文にして、漢文おそ、實に此時代の事情の外部を示すものなれ。されば、其裡面を明かにする國文と、其相頼ること、極めて深かりしあり。

是より先き、淳仁天皇の天平寶字元年、公麻田二十町を大學寮に供し、學生の費用にあてられしかども、桓武天皇の頃に至りては、漢學最も盛んにして、學生の數大に増加し、大學の



費用足らざりしかば、新に學田百三十二町を増加し給ひき。之を勸學田といふ。この後、文徳天皇の頃に至るまで、歴代の天皇、みな意を漢學に用ひ給ひしを以て、漢學の勢を得たり。前代に比なす。貴紳の人々も亦校舎を設けて、教育を獎勵したり。即檀林皇后（嵯峨后）は學館院を建て、橘氏の子弟を勵まし、左大臣藤原緒繼は、藤氏の學校なる勸學院、千戸の封を寄附せり。此外、在原行平の獎學院、恒貞親王の淳和院、菅原大江兩氏の文章院、空海の綜藝種智院等、孰れも皆榮えたりき。されば、漢文の著書も少からざりて、國史には、桓武天皇の朝に、續日本紀、仁明天皇の朝に日本後紀、清和天皇の朝に續日本後紀、陽成天皇の朝に文徳實錄、醍醐天皇の朝に三代實錄の修撰ありき。是に於て本朝の六國史全く成れり。宇多天皇

の朝に、菅原道眞の上りし類聚國史、また有名なるものなり。法制其外の雜書にて、桓武の朝に古語拾遺、大同本紀、嵯峨の朝に弘仁格式、新撰姓氏錄、淳和の朝に令義解、清和の朝に貞觀格式、醍醐の朝に延喜格式等の撰ありき。詩文集には、文華秀麗集、經國集、本朝文粹、都氏文集、菅家文章、性靈集等あり。さて當時の歴史は、専ら編年の体を用ひ、主として朝廷年中の行事、百官の叙任、又は天變地異の類を、年代の順序に隨ひて、列記したる者にして、毫も事實の連絡關係、若くは事變の源因結果を明かにせず。又事實の撰擇をもせず。徒らに卷帙浩瀚なるを以て、よとをたるが如し。其文章は、文撰史、漢等熟語成句を、其儘引用したる處多ければ、さすが華麗なり。と雖も、また決して漢文として見るべき者に非ず。國文學より



觀察を下す時は、續紀の中は、宣命の文ある等を除きては、甚た價值ある者なし。然れども、尙ほ六國史以下の諸書が、史學上は貴重なるもの、今茲に言ふを待たざるなり。漢文詩賦の最も盛に行はれしは、嵯峨天皇の頃なり。當時は、専ら六朝の四六駢儷体の文を書くとを勉めたりしかば、學者の中には、文選を暗誦せし人さへ少からざりき。されば、其文章には生氣なくして、恰も作り花の香氣なきが如し。讀者試に本朝文粹を繙け。必ず、漢文詩賦も、能く當時の人情風俗を寫して、遺す所なきを知らん。又之と同時に、かの八代の文弊を排して、其衰を起せし、韓愈の如き人の出でざりしを嘆ずるならん。此後、醍醐天皇の朝に、遣唐使を止め給ひしよりは、漢學また前日の如く盛んならず。從ひて、漢文を屬するとも、漸く拙くなりぬ。

## 第二章 平假名の製作

漢字を以て國語を寫すに當り、必用に迫られて、片假名の發明あるに至りしことは、既に前篇に述べたり。片假名の出來し後と雖も、漢學益行はれて、漢文を書くこと、最も盛んなりしのみならず、漢字を用ひて、國語を寫すことも、尙多かりしなるべし。然るに、前にも云ひし如く、漢字も、點畫複雑にして、煩はしければ、之を用ふること盛んなるに隨ひ、重し草体の字を用ふるに至りき。蓋し草体の文字は、或る制限の内において、字畫を省略する事自由なるに由り、其效、恰も片假名を用ふるに似たり。されば、此草体漸變して、遂に平假名となりぬ。其字体の一定せしは、嵯峨天皇の頃、僧空海が、いろは歌を作りたる後あるべし。空海は、高野山を開き、密教の眞言を



弘めたる名僧にして、漢字にも精しく、梵語にも通じたりければ、従來行はれたりし、諸種の平假名を精撰し、其四十七文字を以て、佛説を寓したる今様歌を作りたり。然るに、空海も當時の名僧といひ、殊に草聖と稱せられしほどの、能書なりしかば、其書きたりし四十七文字のいろは歌は、平假名文字の標準ともありしなるべし。其効、吉備眞備の片假名に於けると異ならず。平假名を作りたるは、空海なりといふ傳説あるに至りしも、亦片假名を作りしは、吉備公なりといふに至りしと、善く相似たり。但し人々假名を習ふには、片かなを先きにし、平かなを後にせりといふ。

平假名出來しよりは、四十七字をたし知れば、自國の言語語法を以て、如何なる事をも書きあらはし得るに至りしかば、

かの漢字の數千を學びて、尙ほ思ふべきを、充分に寫し得ざるは比すれば、其差違、豈啻は天壤のみあらんや。是れより、人の思想、想像を述べ、感情を寫すこと、漸く盛んとなりしほどに、散文の文學は、さながら旭の昇るが如く、物語、日記、紀行、隨筆、歌序の如き、前代にはなかりし文學も、一時は現はるゝに至れり。既に前篇にもいひし如く、本邦の文學は、歌謡と以て始まり、奈良の朝に至りて、始めて祝詞、宣命等の散文ありしと雖も、これは、韻文を距ること、尙未だ遠からざりき。然るに、片假名先きに成り、平假名後に製作せらるゝに及びて、純粹なる散文、始めてわが文學史中に、曙光を放つに至りぬ。尙此章を讀むには、前篇第二章を參看すべし。



## 第三章 物語即ち小説の文

平假名の出来頃には、既に平假名文の行はれしこと、自然の勢にして、疑ふべくもあらざれど、其平假名文にて、一種の体裁を備へ、平安朝の文學を形づくりたる一大要素となりしもの、即ち、物語文是れなり。抑、物語といふは、もと話説の義よりして、ふるく日本書紀には、談の一字を、ものがたりとよみたり。この名をば、話説を綴りたる書物より用ひ、物語とよみたるものなるべし。我國上古の傳説を、記録したる紀記の二書には、神代よりの物語甚た多し。人皇の御代となりても、夢野の鹿、浦島子などの物語あるは、能く人の知る處あり。降りて平安の朝に至りては、文物大に開け、且つ假名文字の用法自在なりしかば、或は人生の盛衰を述べ、或は脚色を設け

て、人情を寫し、以てかの優美にして柔懦なる、佳人才子の消閑の具となす事、大に行はれたり。物語即ち是れなり。さて、物語なるものゝ文体と結構とを見るに、大略は同トけれども、各少しづゝ異なる處あり。過ぎに一世にありし事、又は己れの經歷を、人に語り聞かするさまとなし、些少なる事實を根據として、之に附會して、之を敷衍したるものあり。或は、全く作者の想像により、趣向を構へたる、空中の樓閣なるものあり。或は世にありしことを、其儘に記録せるものあり。伊勢物語、大和物語等、其第一類に屬し、竹取物語、源氏物語、住吉物語、宇津保物語、濱松中納言物語等、其第二類に屬す。其第三類のものは、名は物語といふと雖も、其實は即ち記録なり。歴史なり。故に、古來之を雜史と稱して、物語と分てり。榮花物語の類、即ち



是れなり。此れは第六章に論ぜべし。

さて、右に云へる第一類と第二類とに屬するものは、社會の事のかたき、おもむろき、哀れあることと綜合し、世態人情を寫したるものなれども、其作者は、概ね翠帳紅閨の貴婦人なれば、其寫す所の區域、甚だ狹隘にして、たゞ平安城裡の四季折々の事物と、男女のなからひとを、題目と爲したりとのみ。而して、之を讀むものは、即ち、かの花に戯るゝ狂蝶の如き、佳人才子にして、皆、讀者が物語中の主人公か、主人公が讀者かと疑はるゝばかりの人々なりしかば、之をよみて、いみじく物のあはれを觀たり。其人物の容貌といひ、言行といひ、其事件の性質顛末は、第三類の物語中のものと、異なることあらざ。蓋し、第一類第二類のものは、當時の人情風俗の小説的記

録にして、第三類のは、歴史的記録なるの差違あるのと。

是を以て、此時代の小説は、殊に歴史の参考となること多し。蓋し我古來の歴史は、いはゞ、途を行きて、路傍の家を外よりのぞき見たらんが如し。内部の事は、少しも知られず。若しよき文明史体の眞史出でなば、其家の内には、如何なる容貌の人の、如何なる衣服を着け、如何なる言行をなすつゝあるかを知り得べし。然れども、人と交際するまは、其住宅、容貌、衣類等にて、大概は知らるべけれど、詳なる處は及ぶべからず。須らく、其内部に立ち入りて、其心裡を窺はざるべからず。物語文は、即ち、其心裡を表はしたるものにして、之を讀むときは、千年以上の人物の胸中も、鏡にかけて、見るが如き思あり。物語の中にて、最も古きは、伊勢物語と竹取物語となるべし。



此二書の中にて、いづれか先、孰れか後といふこと、詳ならず。本居宣長は、源氏物語の文を引き、繪合の卷に「物語の、いさ始めの祖なる竹取の翁は、宇津保の」とし、蔭を合せてと、あれば、此竹取や始めありけん。其物語、誰がいつの代に、つくれりとは、定かま知らぬとも、いたく古きものとも見え、延喜なごよりは、こあたの物とぞ見えたる。」といはれたり。然るに、伊勢物語は、或は在原業平の手になるといひ、或は伊勢の御の作なりともいひて、古來其説一ならざれども、其書の趣をみるに、全く一人の手となりたりとは、考へられず。思ふに、始め業平の書きたる日記、詠みたる歌をば、後の人の補ひ定めたる者あるべし。文中に、延暦遷都の後、遠く距たらざる時のさまを、かきたるなごを見れば、其古きこと、推して知るべき

かり。

今先づ竹取物語を最も古しとして、其脚色をいはん。昔、竹取の翁といふ者あり、野山に分け入り、竹をとりて、種々の事おつかひたりき。或る時、竹の中に、光り耀く少女を見出た。たりしを、とりて養ふ程に、すくくと生ひ立ちて、世に類なき美人となりき。之を赫哉姫といふ。かくと傳へ聞く皇子公達ども、みな思ひをかけ、如何にもして、此乙女を得んとて、備さに辛苦を、嘗め、或は龍の腮の珠をさぐり、或は燕子の子安貝を求め、或は火鼠の皮衣をたづねて、之を挑ましかば、赫哉姫、遂に靡かず。時の帝、このことを聞食して、天子の尊と、四海の富とを以て、之を靡かめんと給ひしが、赫哉姫は、八月の十五夜に、其故郷ある、月の都より下り來り、迎ひの使に伴は



れ、昇天せり。其時、帝に不死の薬を遺し置きたるを、帝は是たに思ひの種なりとて、天に近き高山に登り、かの不死の薬を焚き給ひけり。これよき、其山をふとの山といひ、その煙絶えず、雲の中へたち登るとぞいひ傳へたると、書きて局を結び。今、此書を見るに、其趣向はかくの如く、荒誕不稽なるに似ず。竹の園生の御身、またの上達部の人々が、一婦人のためには、身を忘れて、之れが歡心を得んとし、萬乗の尊、また之れがためよ、心を蕩かし給はんとせしさまを、寫したりしこと、或は、諷刺規諫の意を、寫したるものゝ如くに見ゆと雖も、當時小説を以て、人情風俗を裨益する事は、未だ之を知る者なかりし頃は、これまた、普通の滑稽小説なるのみ。然れども、滑稽の材料を、婦人を挑むに取りしは、既に、平安の朝の文學たるを

示すに足れり。而して、この結構は、佛説寶樓閣經等の書中に、見えたる事實に基くといふ。

其文章は、通常の物語文の優美にのび長じて氣力なきに似せ、少しく適強なるを見る。文法簡潔素樸にして、稍古文に似て。蒼然古色を帯ぶと雖も、其思慕怨恨を寫せる處は、委曲緻密の筆を用ひて、毫も遺憾なからしめ、恰も莊子を讀むが如き感あらしむ。但し、これはかれの如く、艱澁ならざるにより、其古きは似せ、却て解し易し。余輩、其文章の適強なると、滑稽事實を以て、骨子とせしを以て、此書の作者は、たとへ、世人の傳ふる如く、源順からせとするも、尙、學識深遠なる、男子の手に成りしものなると信するなり。

伊勢物語と、竹取物語とは、時代を去る事遠からせ、其文章も、



大に相似たる處あり。殊に其簡潔おいて適強なるところ、或は之に過く、其詞少くして意満ち、好んで結尾の斷截せられたる短句を用ひ、或はてにをばを省きたる處の類、極めて古風なり。要するに、奈良朝の散文は、句節層々相重り、恰も聯珠の如く、文理稍流暢ならざる傾きあり。平安朝に至りては、動詞の語尾を活用して、接續辭に代用すること多きを以て、大に此弊を除きたり。略言すれば、奈良朝の文は、多くの短句を聯ね、平安朝のは、少數の長句を、連ねたるものなり。又形容詞の之をあらはして其下に來るべき名詞を省略するが如き縮約法は、皆此朝に至り始めて行はれしことなり。然れども、全体を評すれば、伊勢物語は、和歌を主として、散文は其附屬物なるが如し、蓋し、散文の部分は、殆ど和歌の序たるに過ぎ

ざるが故に、和歌には秀逸なるもの多しと雖も、散文にはすぐれたる處割合に少し。

伊勢物語のかくの如く、小説よりは、寧ろ序文の長き歌の集若くは、虚飾多き日記、紀行の文とも見るべきものなれば、其書きたる事柄は、連続せるものにあらず、其情事を叙する中に、或は哀むが如く、或は怨むが如く、或は憤り、或は怒る、故に古來、業平を以て放縱自恣の徒と罵り、或は其實、忠誠あるも、時を得せしめて、深く自ら韜晦せしものと贊し、甚しきに至りては、其汚穢敗徳の行も、亦策略なりといふに至る。然れども、余輩は、平安朝の文學に於て、多くの其文章ととりて、其紀事を取らば、或は、其文と其紀事とを取るも、其人を斥くること少からず。此書に於ても、またとはいはざるべからず。



此種類の物語にして、後に出来たるは、即ち大和物語なり。其作者、或は業平の子滋春なりといひ、或は花山天皇なりといふ。皆信せられず。其全体の組織より、文章に至るまで、細大悉く伊勢物語を學びたるものなれども、稍簡淨ならず。又や、遵強ならず、詞多くして實少く、まゝ拙き古言の交りたるのみならず、稀に伊勢物語中の事項を詞をかへて載せたる處などは、いよく其拙きを覺ゆ。後人の偽作竄入せむと思はるゝ處、亦多し。されど、此種類の物語の中にては、伊勢の次に位すべきもの、此書を措きて他にあるべからず。古人も之を賞したり。ことに歌人の必き見るべきものと、八雲御抄にも宣ひき。

次にあらはれたりといひ傳ふる者は、住吉物語、宇津保物語

なり。枕草紙にも、物語は、住吉、宇津保とあれ、甚た古きものなるべし。然れども、此草紙にひへる住吉物語は、早く亡びて傳はらざ。今日に現存する處の住吉は、後人の假托なりといふ學者の定論あり。其文辭を見ても、直ちに其偽作たるを知らるべけれど、さりとして、無下よ卑むべきにもあらざ。其文章は甚た見るべき處あり。宇津保物語は、今本誤脱多く、蠹魚の害を蒙りし處、また少からず。且つ、順序の間違ひたるどころなどありて、如何にも讀み下しがたし。されど、其文章の古色靄然たると、全體の仕組との樸實無味なることによりて、推考するに、此書は竹取よりの、新しくして進みたるものなるべけれど、今の住吉物語よりは、遙かに古代のものたること著し。



以上の諸書何れも、其作者と、其世は公になりし精細なる年代とを、知る能はざるは、遺憾の至なりといふべし。之に次ぎてあらはれし、濱松中納言物語、落窪物語、とりかへばやの類、皆、其作者を詳しせず。而して、源順なる人、とばく、其作者の一人として、世に傳へらる。順は村上、冷泉、圓融諸帝の朝に歴任せし人にして、詩文を能くし、和歌に巧みにして、後撰和歌集を撰びし梨壺五人(後北)の一人なり。嘗て、勤子内親王のたえに和名類聚抄廿卷をあらはし、天地、氣候、人事より、舟車、器具、禽獸、草木に至るまで、一切のもの、和名をとるし、文字の出處を詳にせり。これ實に、後世文學者の、秘寶とするところなり。然れども、此人、官途沈滞、僅かに能登守に至りしのみかぞし、かは、憂鬱慷慨、まゝ、文辭の上にあらはるといふ。其竹

取、落窪等の著者として指さるゝは、信を措きがたしといへども、平安朝の一大國文學者たりしことは、疑ふべからざるなり。

濱松中納言物語に、中納言なる人の、唐土に渡りしとき、その皇后と通し、子を設けて、わが國に還りしことを陳べ、落窪物語に、中納言なる人の女、繼母に憎まれ、寢殿の放出のまた一ト間なる、落くほなる處に住まはされ、落窪の君と呼ばれて、暮らしわびしを、あこぎなる侍女の媒介おて、藏人の少將と契り、遂に家を脱し、此少將と相住みて、榮えたる事を書きし類は、皆當時の風俗習慣をうつしたり。とりかへばやに、或る卿、男女二人の子を有ちしが、男兒はめしむく、女兒はかへりて、雄々しきを悲しむ、いかでか此二人の性質を、とりかへば



やど願ひいおもむきを記せるは、一と通りの作り物語あるべし。かの住吉物語に、中納言兼左衛門督なる人のむすめ。繼母に憎まれて、辛酸を嘗めし末、遂に住吉の浦に流寓せしが、行末大に富と榮えたるさまを寫し、繼母は之に反して、不幸なる境遇に陥りし事を述べたるがごときは、稍後世の所謂勸善懲惡主義を寓したるものゝ如し。此一事を見ても、以此書の他のものよりは、甚だ新しき物語なることを知るに足るべし。

上の云へる如く、物語と名づけられたる書、甚だ多く、尙此外にも、朝倉物語、交野少將物語、ねさめ物語、井手中將物語、梅壺少將物語、自から悔ゆる物語、あし火焚く屋の物語、ふせでの少將ものがたり等、源氏、狭衣、枕草子等に名は擧げられたれ

ども、今傳はらざるもの、極めておほし。然れども、余輩の唯かの絶世の傑作、千古の妙文と稱へらるゝ源氏物語をして、此種の散文を代表せしめ、少しく論ずる處あらんとす。源語は、啻に物語文を代表するものならず、啻に平安朝文學の精粹にして、雅文の極美なるものなれば、余輩は、出來得べきだけの紙面を之に與へんとす。されども、其前に、まづ竹取、伊勢等の文例を示さざるべからず。

龍珠を求めんとして暴風に逢ふ (竹取物語)

我弓の力は、龍あらさふと射ころして、首の玉とりてむ。  
遅く來るや、つばらを待たじとのたまひて、船に乗りて、海  
ごとにありき玉ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に、こき出



そたまひぬ。如何にけむ。はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもちありく。何れの方とも知らず。舟を海中にまかり入りぬべく、吹きまはして、波は舟に打かけつゝまき入れ、神は落ちかゝるやうに、ひらめきかゝるに、大納言はまどひて、まどかゝるまどきめ見ず。如何ならむとするぞとのたまふ。梶取答へて申。こゝら舟にのりてまかりありくに、またかくまどき目を見ず。御船、海の底にいらすば、神落ちかゝりぬべし。若し幸に神のたまはけあらば、南海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御もとに仕うまつりて、すゞろなる死にを、まべかめるかなど、梶取なく。大納言これをきよて、のたまはく。船に乗りては、梶取の申事をこそ、高き山ともたのめ。なご、かく頼母にけなき事を申

ぞと、青へををつきての玉ふ。梶取答へて申す。神ならねば、何わざをか仕う奉らん。風吹き波はけしけれども、神さへいたゞきま、落ちかゝるやうなるに、龍を殺さむと求め玉ふ故なり。はやても龍の吹かするなり。はや神に祈り玉へといふ。よき事なりとて、梶取の神さこゝめせ。をぢなくこころ幼く。龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の筋ひとまぢをたに、動かさ奉らトと。よごとと放ちて、たちる、なくくよほひ玉ふ事、千度ばかり申たまふけにやあらむ。やうく神なりやと。まどき光りて、風は猶はやく吹く。梶取のいはく、これは龍のまわざよこそありけれ。この吹く風は、よき方の風なり。悪しき方の風にはあらず。よき方へおもひきて、ふくなりといへども、大納言は、これをきよ入れ



玉はず。三四日吹きて、吹きかへし寄せたり。濱を見れば、播磨の明石の濱なりけり。大納言、南海の濱に、吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、いきつき臥し玉へり。舟にある男ども、國につきたれども、國の司參うで訪ふにも、得起きあがり玉はで、船底に臥し玉へり。松原に御むしをしまて、おろし奉る。その時にぞ、南海にあらざりけりとおもひて、からうじて、おき上り玉へるを見れば、風いとおもき人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、すもゝを二つ付けたるやうなり。これを見奉りてぞ、國の司もほゝゑみたる。國におほせ玉ひて、たおし作らせ玉ひて、やうくくに擔はれ玉ひて、家に入り玉ひぬるぞ、いかぞか聞きけむ。つかはしゝ男どもまゐり申やう。龍のくびの玉を、得とらさ

りしかば、殿へもえまゐらざりし玉の取りがたかりし事を知り玉へれば、あむ勘當あらトとて、まゐりつると申。大納言、起きいで、のたまはく、汝等よく持て來すなりぬ。龍のなるかこの類におそありけれ。それが玉をとらむとて、そゐらの人々の害せられむとしけり。まゝして、龍をとらへたらまじかば、又こともなく我は害せられなまゝ。よくとらへず止めにけり。かくや姫てふ大盗人のやつが、人を殺さむとするなりけり。家のあたりたに、今は通らト。男どもよあありきそとて、家に少し残りたりける物どもは、龍の玉をとらぬものどもに賜びつ。これを聞きて、離れ給ひしものうへは、腹をさりて笑ひ給ふ。糸をふかせ作りし家は、鳶鴉の巢に皆くひもていにけり。世界の人いひけるは、大



件の大納言の龍の首の玉やとりておはしたる。否さきあ  
らず。みまなこ二つに、すもよのやうなる玉をそへて、いま  
したるといひければ、あな堪へがたといひけるよりぞ、世  
にあはぬ事をべたへがたとひ云ひはじめける。……………

業平東に下る(伊勢物語)

むかひ男ありけり。その男身を用ききものに思ひなして、  
都にはあらど東の方に住むべきところ、求めむとてゆき  
けり。もとより友とする人、ひとりふたりして、いきけり。道  
とれる人、ひとりもなく、まよひ行きけり。三河國、八橋と  
いふ處にいたりぬ。そこを八橋といふは、水のくもせにな

かれわかれて、橋を八つ渡せるに、よりてむん、八橋とはい  
ひける。その澤のほとりの木のかげにおり居て、かれいひ  
喰ひけり。その澤に、かきつばた最とおもはるく、咲きたり  
けり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふいつ  
文字を、句のあみよすゑて、旅心を詠めといひければ、

唐ころも着つし馴れよと妻とあれば

とるく來ぬる旅とぞおもふ

とよめりければ、みか人、かれ飯のうへに、涙落して、ほとび  
にけり。ゆきくして、駿河國うつ山の山に至りぬ。わが入らむ  
とする道はいと暗う、薦かへでの葉繁りて、もの心細く、す  
ゞろなるめを見ると思ふに、修行者あひたり。かゝる道  
に、そいかでおはしたまはつるといふに、見れば、見む人なり



けり。みやこに、其の人のもとにて、文をかきてつく、  
駿河なるうつ山の山へのうつしにも

夢にもひとにあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつてもりに、雪いとらうふれり。

時らぬ山はふじのね、いつとてか

かのこまたらに雪のふるらん

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を、二十ほり、重ね上げさらむかたちにて、なりは、若ほとりのやうになんありける。なほ、ゆきくゝて、武藏國と、下總の國との中よ、いと大きな河あり。それを隅田川といふ。その川のなとりよ、群れるて、思ひやれば、かぎりなく遠くも、來にけるかなと、

ひあへるに、渡守はや船にのれ、日も暮れかんとすといふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、都に思ふ人、あきよしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と足と赤きが、しぎの大ききなる、水の上にあそびつゝ、魚を食ふ。都には見えぬ鳥なり。わたし守に問ひければ、これなん都鳥といふをきよて、

名にとおはゞいざこと問ん都鳥

わか思ふ人はありやなとやと。

とよめりければ、舟こそりて泣にけり。

筒あつゝ伊勢物語

むかへ、田舎をたらひしける人の子さも、井のもとに出でて遊びけるを、をとになりにければ、男も女もはぢかは



してありければ、男はこの女をこそ得めと思ひ、女も此の男をこそと思ひつゝ、母のあはせむといふことをも、聞かぞなむありける。

つゝるつゝ井筒にかけたまろがたけ、

おひにけらしな妹見ざる間に、

かへし、女

くらべこそふりわけ髪も肩をぎぬ、

君ならせして誰かあぐべき。

かく、いひくゝて、遂は本意の如くあひまけり。さて、とこをろ経る程に、女の親、たよりなくなるまゝに、もろともいふかひあくてあらむやとて、河内國高安の郡に、いき通ふ所、いできにけり。さりければ、このもとの妻、あしと思へる

けしきもなく、暮るればいたしたてしやりければ、男異心ありて、かゝるにやあらむとおもひうたがひて、前栽の中にかくれ居て、彼の河内へいぬるがほよて、見れば、この女、いとようけさうして、うちながめて、

風ふけはおきつ白浪たつた山、

夜半にや君がひとり超ぬらん。

とよとけるをきよて、限りなく悲しと思ひて、河内へも、をさくゝいかずなりまけり。さてまれゝ、かの高安へ行きて見れば、始こそ、心にくゝもつくりけれ。今は、うちとけて、髪をまき上げて、みづから、飯かひをとりにて、籠子の器物に、盛りけるを見て、心憂がりて、いかずかりにければ、大和の方を見やりて、



君かあたり見つゝををらむ生駒山、

雲をかくしそ雨はふるとも。

といひて見いたしたるよ、からうとて、大和人、來むといひ  
さりければ、喜びで待つに、たびく、すぎまければ、

君こむといひと夜をどにすぎぬれば、

たのまぬものよこひつゝぞふる。

といひければ、男すますなりにけり。

故郷のたびねの夢(大和物語)

(皇子降)

帝おりの玉ひて、又の年の秋、御ぐとおろし玉ひて、ところ

く山ぶとしたまひて、おこなひ玉ひけり。備前の掾にて、

橘のよととといひける人、内におはしまはけるとき、殿  
上に侍ひて、御ぐとおろし玉ひければ、やがて、御ともは、か  
しらおろしてけり。人にも知られ玉は、ありき玉ひける  
御ともは、これなむれくれ奉らで侍ひける。かゝる御あり  
き玉ふ、いとあはき事なりとて、内より少將、中將これか  
れ、さふらへとて、奉らせ玉ひければ、たがひつゝあまき玉  
ふ。和泉國にいたる玉ひて、日根といふ所、たのしきを夜  
あま。いと心細う、かすかにて、たはします事を思ひて、いと  
かなしかりけり。さて日根といふ事を、歌によめと仰せ言  
ありければ、このよとと大とく

故郷のたびねの夢に見えつるは、

怨みやすらんまたと訪はねば。



とありけるに、皆人なきて、え詠ますなりにけり。その名を  
なん、寛蓮大とくといひて、後までさふらひける。

津の國の乙女塚(大和物語)

むかへ、津の國に住む女ありけり。それをよはふ男二人な  
んありける。某の國に住む男、姓は、うばらになんありける。  
今一人は、和泉國の人になんありける。姓は、ちぬとあにい  
ひける。かくて、其の男ともよはひ、顔かたち、人の不ぞ、たゞ  
同じばかりになむありける。心ざらのまさらむにこそは、  
あはれと、たもふよ、こゝろざらの程、たゞ同トやうなり。暮  
るれば、諸共に來あひぬ。物れこそすれば、唯同じやうにおこ  
す。いづれ、まされりといふべくもあらず。女、思ひわづらひ

ぬ。この人の志の愚かならむ、何れにもあふまじけれと、此  
れも彼れも、月日を経て、家のかさに立ちて、萬にこゝろざ  
らむ見えければ、むわびぬ。これよりも、かれよりも、同じや  
うよれこそするものぞも、とりも入れねと、いろくゝに持ち  
て立てり。たやありて、かく見苦しく年月をへて、人のなけ  
きを、徒にたふもいと不む。ひとりにあひなほ、いまひとり  
が思ひは、絶えなむといふに、女、こゝろをさ思ふに、人のこ  
ゝろざらの同じやうなるになむ、思ひこづらひぬる。さら  
ば、如何すべきといふに、そのかはいくたの川の面に、ひら  
はりをうちてゐにけり、かゝれば、そのよはひ人をもを呼  
びにやりて、親のいふやう、たれもみこゝろざらの同じや  
うなれば、此の幼きものなむ、思ひこづらひて侍る。今日如



何にまれ、此の事を定めてむ。あるは、遠き所よりいまそる人あり。あるは、こゝながらそのいたつき、限りなし。これもかれも、いと不しき業なりといふ時に、いとかく、喜びあへり。申さむとれもひ玉ふるやうは、此の川に、浮きて侍ふ水鳥を射たまへ、其れを射あて玉へらん人に奉らむといふ時よ、いとよき事なりといひて、射る程に、ひとりは、かゝらの方を射つ。今一人は、尾の方を射つ。何れといふべくもあらぬよ、女思ひこづらひて、

住こひぬこが身をけてん津の國の、

生田の川は名のとなりけり。

とよきて、此のひらばりの川にのぞきて、とさりければ、つぷりと落ち入りぬ。たや、あこて騒ぎのゝしる程に、此のよ

はふ男二人、やがて同じ處に落ち入りぬ。ひとり、足をとらへ、今一人は、手をとらへて、死にけり。そのかゝ親甚じく騒ぎて、取り上げて、泣きのゝしりて、葬りす。男どもの親も來にけり。此の女の塚の傍よ、又塚どもをつくりて、ほりうづむ時に、津の國の男の親のいふやう、同じ國の男こそ、同じ所にはせめ。異國の人のいかで、此の國の土をばえ貸すべきといひて、妨くる時に、和泉の方の親、和泉國の土を舟に運びて、こゝに持て來てなむ。終にうづみてける。されば、女の墓を、中にて、左右になん、男の塚ども今もあんなる。

一條天皇嘗て宣はく。朕、不徳なりといへども、唯人を得るの



一事は、敢て延喜天曆の世に譲らずと。當時源經信、藤原公任、源俊賢、藤原行成は四納言と稱せられ、閨閣の秀才には、清少納言、赤染衛門、和泉式部、伊勢大輔の流あり。各文學を以て鳴る。就中、紫式部を以て第一となす。是れ實に源氏物語の作者なり。

紫式部は、右衛門權佐藤原宣孝の妻なり。其父、式部丞藤原爲時といふは、菅三品の門に遊びて、文章生より起こり、越前守となりし學者なり。式部の兄、惟規、伯父、太皇太后宮亮爲賴等、皆歌を以て名あり。式部、性聰敏にして、いとけなき時より、兄の書を讀むを聽き、之を暗記せしことありといふ。父爲時甚ど之を愛し、常に口惜しう、男子にもたぬこそ、幸なかりけれ。』と云ひき。年、稍長トて、博く和漢の書史を涉獵し、朝廷の典禮

故實に通じ、且つ、最も文詞を巧みにせり。夫、宣孝に早く後れて、寡居おたりしが、時に一條天皇の中宮彰子、藤原道長の女、上東門院と號す。婦人の才學あるものを撰びて、左右に侍らしめ、文詞の御遊ありしかば、式部またおはく、伺候して、御覺えめでたかりき。或はいふ、源語五十四帖も、村上天皇の皇女、大齊院、選子内親王が、中宮に徒然慰むべき、めづらしき草子や侍ると、たづね給ひしとき、中宮は宇津保、竹取などは目馴れ給ふべければ、新らしく作りて、上らんとおほし、さて、式部に命じて、綴らしめ給ひしものなりと。然れども、此説に就きては、古來疑義多し。學者多くは、宮仕への前、寡居せしあひさの作ならんといへり。又傳ふ、此書成りしとき、一條天皇、觀覽ありて、是れ能く日本紀を讀みたる者の筆なりと賞し給



ひしかば、式部は、これより、日本紀の局の名を得しと。其才華かくの如し。然れども、其著はすところの日記を觀るよ、思はるよ、似ず、順良謹慎よしして、所長に矜らざりしことを知る。又貞淑にして、節操の譽高く、御堂關白道長が、其才色を悦びて、之を挑むるときも、遂に従はざりき。此時、道長は、上東門院の父を以て、威權極めて盛んなりしに、式部の其挑むを拒むしこと、男子も愧づる色有るべし。古來の俗傳に、式部は道長の妾とかれりといひ、又若かりしときは、西宮左大臣高明と通ふたりといふの非なることは、古人既に之を辨して、また遺すところなし。嗚呼、當時、淫奔浮薄の空氣天地に滿ち、諸姫嬪は、妓流を去ること遠からざりし中に於て、毅然として、獨り高かりしをおもへば、紫式部は、實に文辭を以て、千歳の

摸範たるのとなりず、また徳行を以て、閨閣の龜鑑たるべきものなるべし。或る書に、式部を評して、古往今來唯一人の婦人なりといひしも、過言にはあらざるべし。

紫式部の本名は傳はらず。紫の名は、源語の中に、女主人公紫の上のことを寫さしところ、特に秀れたるがゆゑに、始め藤式部と云ひしを、今の名に更められしに基くといひ、或は、藤式部の名は、玄妙ならざるにより、其花の色をとりて、紫の字に換へしなりといひ、或は一説に、式部は、一條天皇の乳母の子なり。上東門院に仕へしめられしとき、天皇これは我があかりの者なり。あはれとおほしめせと、申させ給ひしといへるに據り、さて、武藏野の故事に基きて、紫式部と名づけられたりといふ。諸説紛々として、孰れか是なるを知らず。



源氏物語は、源氏の君といふ容貌極めて都雅よし、情に富み、諸藝に通じたる皇子を以て、主人公とし、配するに紫の上といへる絶世の佳人を以てして、其履歴を骨子とし、無数の人物、複雑なる事件を、之に纏ひたるものあり。叙事の時代は、醍醐、朱雀、村上の三朝に亘るととなへ、且つ、物語中の主要なる人物は、多少准據する處ありと稱せらる。一部五十四帖を以て成る。世は源氏卷の次第文字鎖なるものあり。其何れの時代に、何人の手に成りしかを知らざれども、総て文字鎖あるものは、平安朝の末葉より、室町時代まで行はれし、文章上の一種の遊戯なり。されば、茲に之を掲げて、五十四帖の名稱を定めし、併せて文字鎖の一例とせん。文中圈點を施したる者は、即ち五十四帖の名目なり。

源氏卷次第文字鎖

源氏の勝れてやさしき、墓なく消えし桐壺よ。餘所にて見えし帚木、我から音になく空蟬や。休らふ道のゆふがほは、若紫のいろこと。匂ふ末摘む花の香に、錦と見えし紅葉の賀。かせをいとひと花の宴、むすびかけたる葵草。さか木のえたお置く霜は、花散る里のほとよぎす。須磨のうらみよ沈まじ忍びてつとふ明石。瀧たのめと末のみをつぐ。おけき蓬生露ふかき、水に關屋のかけうつらぬふむなる繪合や。宿にたえせぬまつかせも、ものうき空の薄雲よ。世を朝顔のはなのつゆゆかり思ひし乙女子が、かけつよおのぶ玉葛。らうたき春の初子の日、ひらくる花よ舞ふ蝴蝶。ふりきはたるの思こそ、そのなつかしき常夏。



や。や。り。水。を。ぐ。し。か。り。火。の。野。分。の。風。の。ふ。き。ま。よ。ひ。日。か  
 け。曇。ら。ぬ。御。幸。の。花。も。や。つ。る。藤。は。か。ま。ま。さ。の。柱。は。忘  
 れ。ト。を。を。る。梅。か。枝。の。匂。ふ。や。と。と。け。に。し。ふ。ぢ。の。裏。は。か。な。  
 な。に。と。て。摘。じ。若。菜。ぞ。も。も。りの。栢。木。な。ら。の。葉。よ。横。ぶ。る。の  
 音。は。お。も。ろ。や。宿。の。す。む。む。の。聲。も。憂。く。く。ら。さ。夕。霧。秋。ふ  
 か。と。御。法。を。さ。と。る。い。そ。の。蛋。ま。ろ。の。世。の。程。も。なく。雲  
 か。く。れ。に。と。夜。半。の。月。聞。く。名。も。匂。ふ。兵。部。卿。う。つ。ろ。ふ。紅。梅  
 色。ふ。か。と。忍。ぶ。ふ。と。ある。竹。河。や。や。そ。宇。治。川。の。橋。姫。の。れ。か  
 れ。果。て。に。し。椎。が。本。と。も。に。結。び。し。総。角。は。春。を。忘。れ。ぬ。さ。と  
 ら。び。も。も。と。の。色。なき。宿。木。や。や。と。り。と。め。き。と。東。屋。の。の。ち  
 の。名。も。う。き。舟。の。道。契。り。あ。た。なる。か。け。ろ。ふ。を。己。が。す。さ。び  
 の。手。習。は。は。て。そ。ゆ。か。と。き。夢。の。浮。は。し。

右五十四帖のうち、雲隠れの巻のみは、名ありて文なし。蓋し  
 此巻には、源氏の君の薨去を、暗に哀めたるものなるべし  
 といふ。されば、其れより以下は、多くは、其子、薰大將の事、係  
 り、特に橋姫より、結尾の夢の浮はしに至るまでを、宇治十帖  
 ととなへ、以て本文と分つといふ。

此物語、古來盛んに弄ばれ、我國文學上の至寶として貴ばれ  
 しかば、之が註釋を下し、評論を試みれる書、いと多し、素寂法  
 師の紫明抄、一條兼良の花鳥餘情、牡丹花肖柏の弄花抄、西三  
 條公條の細流抄、西三條實澄の明星抄、九條植通の孟津抄、紹  
 巴の源氏紹巴抄、中院通勝の岷江入楚、能登永閑の萬水一露、  
 熊澤蕃山の源氏外傳、僧契冲の源語拾遺等、其重なるものよ  
 して、此他舉げて數ふべからず。就中、解釋簡單にして其要を



得、初學の徒に便あるは、北村季吟の湖月抄六十卷なり。此書の事は、尙第六篇江戸時代の文學の條下に云ふべし。萩原廣道の源氏評釋は、未完の書なりといへども、湖月抄よりは更によし。又、式部が物語に就きて、懷きと見解とおほしきもの、及び其文學上の技倆は、本居宣長の玉の小櫛之を詳かにし、其才德兼備の閨秀たりしことは、安藤爲章の紫女七論に辨じたり。源語を繙ぐもの、必き少くとも、此四書を參看せざるべからず。

かくの如く、此物語を解釋し、評論するもの極めて多き中には、佛者の、此書は徹頭徹尾佛典に據りて作られたるものにして、天台六十卷に擬して、六十帖に作り成し、生老病死、有爲轉變を説き、尙進んで、世間常住壞空の法文をたて、煩惱即

菩提を示すといひ、儒者は、莊子史記に基き、一字の褒貶は春秋に則り、以て仁義五常を論すと説く。甚しきに至りては、式部後に妄語の罪障懺悔のため、般若一部六百卷を自書して、石山寺に奉納したりといひ、安居法印聖覺なるものは、源氏物語表白なるもの一卷を作りて、「南無西方極樂彌陀善逝、ねがはくは、狂言綺語のあやまりを翻して、紫式部が六趣苦患を救ひたまへ。南無當來導師彌勒慈尊、必ず轉法輪の縁として、これを弄はん人を安養淨刹に迎ひたまへ。」とさへ云へり。然れども、平安朝の形勢を詳にたる人は、余輩が前篇にいへる如く、佛教と漢學との影響極めて盛んなる時にあらはれ、亦かも漢學に通じ、佛典にも明かなりし紫式部其人の如き、名家の手になりし大作なれば、其痕跡の昭々たるを怪



まさるべし。安き、専ら漢籍にのみ基くといひ、佛書にのこ據りて作れりといはんや。古の國學者の中には、往々かゝる拘泥説を墨守する者、少なからざりとなり。

源語の文章の妙は、其思想結構の巧と相合し、著書の上乗として、稱へられつべき價值あるものなる事、世既に定論あり。今ことさらに言ふを待たず。されば、漢學の之行はれて、耳を彼土に尊くし、目を我國に卑うせし人々も、此書を讀みては、必き言ふべからざる妙所を見出し、遂に或る點に於ては、漢文も企て及ぶべきよあらざと思はしめし事、常なりき。殊に、今日に於ては、西洋各國の文學と對照せられて、尙一層の光輝を發揚し、我文學の面目を施し、疑ふべからず。其筆の自由自在にして、意の到る處に従ひ、ざるをなく、情の赴く

處に伴はざるなきは、假名文字なる利器を有するに由り、又其學識の深邃なるに由るべし。とはいへ、如何にも、其高妙あるに驚かるゝあり。其妖艶美麗の筆は、身外の森羅萬象を抽きて、精細遺すところなく、山青水明の景よ、讀者をして、足其境を踏むの想あらしめ、春花秋月にも、目その物をとるが如き感あらしむるのこならざ、婉曲縝密の文、能く喜怒哀樂の情の更なり、幽玄深遠なる思想、複雑摸捉しがたき想像をも寫し出して、明鏡に向ひ、炬火を觀るが如くならしむ。殊に、かの雨夜の品定め的一段の如きは、議論体の雅文の摸範として、人口に膾炙する處にして、其女子の品評を題目とし、飽くまで思ひを泄へ、考を凝らし、縦横錯綜せる事柄を論じ、短氣の人なりせば、おぼく、一刀兩斷の途に出づべきを、媿



々幾千言を重ねるに至るとも、遺す處なく、叮嚀に之を分疏し、讀者をして、其坐しありて、親しく其評論を聽くが如くならぬ。め讀み去り讀み來りて、無限の趣味あるを覺えしむ。然れども其文は、猶温厚謹慎にして貞靜なる其人の如く、到る處其銳利なる筆鋒を裹むを見る、玉の小櫛にも「女の學問たてして、賢したち、さえがるをばいみじう憎みて、自からも、人にあか思はれ」と、深く用意したるさま處々に見ゆ」といへるが如き。概していへば、紫式部の文は、艷麗緻密にして、其特異の點は、温厚沈着なるに在り。逸氣奔放の一點に至りては、或は枕草紙に譲る處あるべし。而して、一篇の中、文章の抑揚起伏、照應等の用意を、周密にせるものは、王朝の文、一としてこの書の上にお出づるものなむ。但し平調に流れ易きと、氣力

の薄き事とは、此種の文体一般の弱点なるが上、特に婦人の手になりしものなれば、到底之を掩ふこと能はざるべし。余輩は、此物語の文例を撰ぶに當りて、他の書には例なき困難を覺えたり。蓋し全篇處として妙ならざるなれば、殊に其一部分を拔萃するは、猶瑩々たる白玉を碎きて、其一片を示すが如く、又金殿玉樓の中より、一斑の裝飾物を持ち來りて、其全豹を想はしむるが如くなればなり。然れども、古人の特に秀でたりといひし處と、余輩の絶妙と覺えしものを、此章の末に掲ぐべし。世に傳ふ、古藤原定家は、明石の卷の「三昧堂近くて、かねの聲、松の風にひびきあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根さしむ、心はへあるさまなり。前栽さしむ、虫の聲をつくりたり、こゝかにこの有りさまなど



御覽を娘住ませたる方は、心殊に磨きて、月入れたる櫛の戸口、けしきはかり推しあけたり……」

云々とある一節を、一部中第一の語なりといはれたり。されば、余輩が掲げたる數頁は、或は源語の文の一斑を示すに足らん。

式部の和歌に巧みなりとこと、源語一部中に載せたるものをもて知るべきなり。梨壺五歌仙の中、恐らくは紫式部の右に出づるものなからん。其名歌の勅撰集に入れるもの亦多し。(梨壺五歌仙の事後)

源語を小説として視るときは、如何なる價值あるものかは、余輩は、茲に詳論せざるべし。但し、其富贍なる想像により、充分意匠を凝らして、一篇の脚色を設け、亦かも奇思、妙想に過

ぎず、人物、景色、情況、事件の配置、權衡、前後相照應して、また著るべき缺點なきは、余輩の信ずる處なり。悲哀なる情況を寫せる筆力は、桐壺、夕顔等の卷に於て、讀者をして覺え、暗涙を催さしめ、其滑稽(コメディック)を寫すところ、紅葉の賀の卷等に於て、啞然として笑はしむ。特に其人物をして、各特質を有せしめて、源氏の君の終始閑雅にして、情も富むたる。紫の上の婉柔にして、飽くまで上躡めきたる等、皆劃然として、分別し得べし。後世の作者の、全一人物をして、交るゝ異様の假面を蒙り、話説中にあらはれしむるが如き、破綻には陥らざりしなり。さて此書の、式部が、當時平安城裡の實相を寫し出でたるものなれば、完全なるわが寫實流小説の、最も古くして且つ最も巧みなるものなるべし。然れども、式部の、寫實より入りて、



理想の境に進むたるものある事を知らざるべからず。既に前に云ひし如く、當時の上流社會は優柔懦弱にして、詩歌、管絃を弄び、花鳥風月に戯るゝ外は、唯癡嬌を事とせしのみ。源語も其材料を、これ等の眞像より取りしは相違なしといへども、もと作り物語なるが故に、よき人としたる人の上の事は、何事もめぞたからざるはなく、あしき方に伴ふことは、一として悪しからざるはなく、善きは極めて善く、悪きは極めて悪しく、描き出せるが故に、其人物は概ね所謂理想的の人物なるのみ。事實を寫してもまた然り。理想的とは、事物の十全なる程度を示したるものにして、到底この世の中には、看當り得ざるも、若しあらば、當に然るべからんものを云ふ。源氏の君、紫の上、孰れか理想的の才子、又は佳人ならざるべき。

理想的の事多きが故にこそ、遂に源氏の君と、藤壺の女御との密通の如き、云ふに忍びざる事をも、書きつくるに至りたるなれ。抑、古來源語を論ずる者、之を罵る人は、其事柄を以て其文辭をさへ取らず。之を賞する人は、其長所は眩惑せられて、其缺點短所をも曲庇する傾あり。殊に、佛書に引きつけ、漢籍に付會して論ずるものは、源語を以て、善を勧め、惡をこらし、好色を誡むる道德書なりといひ、甚しきに至りては、此書が、延喜の朝を心あてとして書き出さしは、上六國史に繼がんが爲なりなるといふ。妄言も、こゝに至りて極まれり。本居宣長の玉の小櫛の如きは、此書は關係ある從來の諸書を是非褒貶して、大に正確なるものなれば、かの安藤爲章の紫女七論に尙免れざりし、源語の勸懲の書なりといふ見解



を排斥して、此書の、單に社會の真相を寫し出たせるまでのものありといひき。是れ、さすがに宣長の卓見なりといふべし。然れども、尙まゝ曲庇の跡の、昭々として掩ふべからざるを見る。蓋し淫風は、當時の習ひなれば、理想的の淫風を示さんには、源氏と藤壺との如き、甚しきことをも、寫し出でざるべからず。是れ實は、心理小説家の忌む處なりとす。然るに宣長の、これをしも差支なき。その物語は、物のあはれを知るを旨とす。源氏も不徳不品行あり。然れども、是れ物のあはれを知るより起れることなりとして、世はすぐれてよき人となりて、物の哀れの忍び難き事もあればなり」といひ、遂に「戀の中にも、さやうのこりなく、あながちなる筋には、今ひときり、物の哀の深きとある故に、ことさらに道ならぬ戀をも、書き

出で、そのあひたゞ、深き哀を見せたるものなり」と説きたるは、曲庇にあらすして何ぞ、總て、美術上の製作物は、深意あるを要す。深意なき時は、其製作物、死物たるを免れず。死物と雖も、其美術品たるには妨げなければ、美術品の上乗とはいひがたきなり。而して其深意なるものは、必ず善と美と眞との三觀念の齊一を標準とし、之に接近せんことを求むるものならざるべからず。抑も、純善、純美、純眞の齊一は、之を人間世界には求むべからずと雖も、この理想を標準と定め、其方角に向ひて、進歩せんことを務むるは、日常人々の、當に口に言ふべく、又當は實際に行ふべき所なり。特に、美術上の製作物の如く、動もすれば、人をして柔懦驕奢に流れしめ易きものに於ては、特に意を之に注かざるべからず。惜い哉、昔人は



いまだ此考なく、唯小説は、人を娛まむるものなる事をの  
とちりて、人を誨ゆる者なるをばらざりけん。紫式部の  
如き、其人物は、殆ど善、眞、美を兼有すと雖も、其著書は、即ち文  
學上の至寶にてありながら、動もすれば、誨淫の書なりと譏  
られ、敗徳亂倫の文なりと斥けらる。遺憾の極といふべし。顧  
みて惟ふに、婦人は多く謹慎なるが故に、不徳の行は、成るべ  
く之を隠庇すること、古今東西の婦人作者に見る處なり。然  
るに紫式部にして、尙源語をかきしを見れば、蓋し當時の風  
俗、如何なりしかを察するに足るべし。且つ、源氏と藤壺との  
關係の如き、も之を實際にあらため、さて源氏が臣下の人  
なりしならん、これ畏くも、皇家の御系統に關する事にあら  
ずや。余輩之を考ふれば、英王チャールズ二世の時代に、上

下の風俗壞亂して、名譽とは、婦人の貞操といへると等しく、  
單に虚名なるのみ、徳とは、唯愚人を嚇すの語に過ぎざりとい  
ふ有様となりしかば、其文學も卑陋を極め、貴婦人に向ひて、  
卿はチャールズ時代の某々の書を讀み玉ひしかといへば、  
顔をあからめて、話頭を他に轉せしめ、又、或る人をして、當時  
の書を讀むは、時と金とを棄てし、不徳を學ぶものなりと云  
はしめしを思ふと、屢なり。

源氏物語は、名にしておふ大篇なるが故に、記事、叙事、議論の文  
等、中古文章の種類、大抵その中お備はれるのみならず、對話  
問答の條最も多きにより、平安朝の通用語の如何なりしか  
を推測し得るの便あり。抑も、源語の文章は、純粹なる言文一  
致に非ざるべきも、其對話問答の條は、蓋し其實際を去る



こと甚た遠からざるべし。殊に一篇の中、處々に散見する往復文あるを以て、當時消息体の文章の一斑を窺ひ得べし。はじめは、漢學の盛んあるにつれて、男子の往復文、ことに表とちての書面は、専ら漢文のみなりしが、假名の用ひ益開くるに從ひ、從來婦人の間にのみ行はれたりし假名文の次第に男子の間にも通用するに至りしと見ゆ。茲に源語より一二の例を掲げ、且つ参照に供へんため、落くほよりも、一例を引用せり。

紫式部、女子あり、賢子といふ。太宰大貳高階成章に嫁し、のち後一條天皇の乳母となりて、三位に叙せられしにより、大貳三位と稱ふ。母に似て、文詞に巧みなりしかば、狹衣八卷を作れり。狹衣大將なるものを設け、其物語を綴りしものにして、

趣向文章、共に母の源語を摸したるがごとしと雖も、遠く之には及ばず。

朱雀院より、姫宮の事を、紫の上よのたまひ遣はされたる文。(源氏物語若菜の卷)

稚き人の心地おきさまにて、うつろひものすらんを、罪なくおほし許して、後見たまへ。たづね玉ふべき故もやあらん。そむきよし此世にのこる心こそ、いる山道のほたとなりけれ。やみをえはるけく、きこゆるもをこかまじや。

源氏の君、須磨にうつろはんとし玉ふ時、東宮に侍ふ王命婦のもとよ。(源氏須磨の卷)



今日なん都離れ侍る。また参らずなりぬるなん、數多の憂  
にまさりて、思ひ玉へられ侍る。よろづおとはかりとりけ  
いと玉へ「いつかまた春の都の花を見ん。時うしなへる山  
かつらして」

王命婦のかへし

御かへりは、さらに聞えさせやり侍らせ。御前より啓し待り  
ぬ。心細けにおぼしめしたる御氣色も、いとじうなん「咲き  
てとく、散るはうけれき、ゆく春は、花の都を、立ちかへり見  
よ」時とあらは、

衛門督より中納言どのに、落窪物語

きのふ、越前守してさこえし御消息は、申されけんや。御い

とまあらは、今日、必ずたちよらせ玉へ、聞えさすべきこと  
あり。

源氏物語の例

桐壺更衣の卒去

そのととの夏、御息所はかなきことちわづらひて、まか  
でなんとと玉ふを、暇さらみ許させ玉はず。年頃つねのあ  
つしさになり玉へれば、御めなれて、猶おほしころとよ  
とのと、のたまはするよ、日々に重り玉ひて、たゞ五六日の  
程よ、いとよはうなれば、母君、なくく奏して、まかでさせ  
たてまつり玉ふ。かゝるをりにも、あるまじき耻もこそと、  
心づかひして、御子をば留め奉りて、忍びてぞ出玉ふ。限り



あれは、さのともえ止めさせ玉はせ、御覽下たにおくらぬ  
おほつかなさをおほさる。いと匂ひやかに、  
うつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いと哀れと、物を思  
ひしをながら、言にいでしも聞えやらす、あるかなきかに、  
消え入りつしものし玉ふを、御らむするよ、來しかた行末  
おほしめされず。よろづのを、なくし契りのたまはず  
れど、御いらへもえ聞え玉はず。まをなごも、いとたゆげし  
て、いとよなよくと、われかの景色にて臥したれば、いか  
さまにかと、おぼしませはる。手車の宣旨なごのたまはせ  
ても、又入らせ玉ひては、更にゆるさせ玉はせ。限あらむ道  
にも、後くれ先たしと、契らせ玉ひけるを、さりととも、打棄  
てしはえ行きやらじとの玉はするを、女もいとみりと、

見奉りて、

限りとてとかるし道のかなしきよ、

生かまほしきは命なりけり。

いとかく思ふ玉ひましかほと、いきも絶えつし、聞えまほ  
しげなるとはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、  
かくながら、ともかくもならむを、御らむし果てむとおほ  
しめすに、今日、始じむべき修法ごも、さるべき人々うけた  
まはれる、今宵よりと聞えいそがせば、こりなくおほしあ  
がら、まかでさせ玉ひつ。御胸のみ、つとふたがりて、つとま  
そろまれど、あかしかねさせ玉ふ。御使の往きかふはごも  
なきよ、なほいぶせさを、かぎりなくの玉はせつるを、夜中  
うち過ぐるほごになむ、絶えはて玉ひぬるとて、泣きさこ



けは、御使もいとあへさくて、かへりまゐりぬ。まことしめす  
 御心まごひ、何事もおぼしめしごかれせ。籠りおはします。  
 御子はかくても、いと御覽せまふしけれど、かゝる程よ、さ  
 ふらひ玉ふ例なきをなれば、まかで玉ひなんどす。なに事  
 かあらむ共おもほしたしき。侍ふ人々の泣きまごひ、上も  
 御涙の隙なくながれおはしますを、あやととてたてまつ  
 り玉へるを、よろこびにたに、かゝる別の悲しからぬは  
 なきごさなるを、まして、哀にいふかひなく。かぎりあれば、  
 例のさほうにをさめ奉るを、母北の方、おなと煙にものぞ  
 りなむと、なきごがれ玉ひて、御おくりの女房の車に、おた  
 ひのり玉ひて、愛宕といふ所に、いといるめしう、其さほう  
 忘たるに、おはし着きたる心地、如何ばかりかはありけむ。

むなごき御からをみるく、猶おはするものと思ふが、い  
 とかひなければ、灰になり玉はむを見とてまつりて、今は  
 無き人とひたふるに思ひなりなむと、さかじうの玉ひつ  
 れど、くるまより落ぬべう、まごひ玉へば、さは思ひつかし  
 と、人々もてごづらひ聞ゆ。内より御使あり。三位の位、贈り  
 玉ふよと、勅使きて、その宣命よむなむ、悲しきとなりける。  
 女御とたにいはせきなりぬるが、あかず口惜うおぼさる  
 れば、いまひときごの位をたにと、贈らせ玉ふなりける。  
 (中略)まもなく日頃そきて、後の業なごよも、あまかに吊は  
 せたまふ。(中略)野分たちて、俄にはた寒き夕暮のほご、常よ  
 りもおほしいうるごおほくて、靱負の命婦といふを遣さ  
 す。夕月夜のをかじきほごに、いごしたてさせ玉ふて、やが



て眺めおはします。かうやうの折の御遊びなごせさせ玉  
ひしに、心異なる物のねをかきならし、はかなく聞え出る  
言の葉も、人よりは異なりしけはひかたちの、面影につと  
添ひておやさるゝも、やみのうつゝには尙劣りけり。命婦  
かゝここにまかてつきて、門ひきいるゝより、けはひ哀なり。  
やもめ住なれど、人ひとりの御かゝづきにと、かくつくろ  
ひたてゝ、めやすきはごにて過ぐし玉へるを、やみにくれ  
て臥ししづみ玉へるほとゝ、草もたかくなり、野分はいと  
ゞ荒れたる心地して、月かけばかりぞ、八重葎にもさゝら  
ずさゝ入たる、南おもておおろして、母君もとみに得もの  
もの玉はず、今までとまり侍るがいとうきを、かゝる御使  
の、蓬生の露わけいり玉ふにつけても、はづかしくなむと

て、けにえたふまどくなく玉ふ……………

雨夜の物語

つれ〜と降り暮して、しめやかなる宵の雨に、殿上にも。  
おさ〜人少なに、御とのる所も、例よりはのどかなる心  
地するに、おほとなぶらちかくて、ふみごもなご見玉ふつ  
いでに、近き御厨子なる、色々のかゝなる文ごもを引き出  
でて、中將ごりなくゆかしがれば、さりぬべき少しは見せ  
ん、かたごなるべきもこそと、ゆるし玉はねは、その打解け  
て、かたはら痛しとおやされむこそゆかしかれ。をとなべ  
たる大方の、數ならねご、程々につけて書きかはしつゝ  
も見侍りなむ。おのがおゝ怨めときをり〜、まぢがほなら  
む夕暮なごのこそ、見ごころ、はあらめと怨すれご、やむと



なくせちよ隠し玉ふべきなほ、かやうにおほぞうなる御厨子なほに、うちおき散し玉ふべくもあらず。深くとりかくし玉ふべかめれば、是は二のまぢの心やすきなるべし。かたはしづし見るに、かくさましくなるものさもこそ侍けれとて、心あてよ、それかかれかなと問ふ中に、いひあつるもあり。もてはなれたる事をも、思ひ寄せて疑ふもをかしくおほせと、言少なにて、とかくまぎらはしつし、とりかくし玉ひつ。足下そにこそおほくつとへ玉ふらめ。少しみはや。さてなむ、この厨子も、心よく開くべきとのたまへば、御覽し所あらむこそ、かたく侍らめなと聞え玉ふついで、女よの是はしものと、難つくまじきは、かたくもある哉と、やうくなむ見玉へしる。たゞ、うはへばかりの情なさにて走り

書きをりふし答へ心えて、うちなほばかりは、せいおむに宜しきも、多かりとみ玉ふれと、そも誠に其のかたを取りいでむ撰びよ、必ず洩るまじきはいとかたしや。我心得たる事はかりを、おのが志し心をやりて、人をは貶しめなど、かたはら痛き事おはかり。親おまたちそひもてあがめて、生い先きおもれる窓の中ある程は、たゞ、片かさを聞き傳へて、心を動す事あもあめり。容をかしくうちおほどき、わかやかにて、まぎるし事なき程は、かあきをさびをも、人まねお心あに入るし事もあるに、おのづから、一つ故づけていづる事もあり。見る人、おくれたる方をばいひかくし、さてありぬべきかたをばつくろひて、まねび出すに、それ然あらじと、そらにいかに、は、押量り思ひくたさむ。誠かど見も



て行くよ、見劣りせぬやうはなくなむあるべきと、うめき  
たるけしきも恥しげなれば、いとなべてはあらねど、我も  
おやとあはする事やあらむ。うちほゝゑみて、其のかたど  
もなき人は、あらむやとの玉へは、いとさばかりならむあ  
たりには、誰かは、すかされ寄り侍らむ。とるかたなく口惜  
しきさはと、優なりとおやゆばかり、すぐれたるとい、數ひ  
としくこそ侍らめ、人の品たかく生れぬれば、人よもてか  
しづかれて、かくるゝ事もおほく、自然よ、其のけはひこよ  
なかるべし。中の品になむ、人の心々おのがじゝのたてた  
る趣も見えて、よかるべき事かたゝ多かるべき。下のさ  
さみといふきはよなれば、ことよ耳たゝせ、切として、いと  
隈なけなる氣色なるもゆかしく、その品々や如何よ。い

づれを三の品におきてか分くべき。もと品高くむまれな  
がら、身は沈み、位みじかくて、人けなき。又、なを人の、上達部  
なごまでありのほりたる、我の顔にて家のうちをかざり、  
人に劣らじとおもへる、そのけぢめをば、いかゞ分くべき  
と、問ひ玉ふ程に、左の馬の頭藤式部のせう御物忌に籠ら  
むとて、参れり。世のすきものにて、ものよくいひとれるを、  
中將まぢとりて、このおなくゝをこきまへさごめあらそ  
ふ。

陋巷の夕顔

きりかけごつものにて、いと青やゝなるかつらの、心地よけ  
にはひかゝれるに、白き花ぞおのれ獨ゑとの眉ひらけた  
る。をちかた人にも申をど、ひとりこち玉ふを、御隨身つ



いるて、かの白く咲きけるをなむ、夕顔と申侍る。花の名は  
 人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲き侍りけると申け  
 りいと小家がちね、むつかしけなるをたりの、此面彼面、あ  
 やしう、打よろほいて、むねくしからぬ軒のつまなさに、  
 はひまつはれるを、口惜しの花の契りや、一ふさ折りて参  
 れとの玉へは、この押しあげたる戸に入りてをる。流石に  
 されたるやり戸口に、きなるすゞしのひとへ袴、長く着な  
 したる女の童の、をかしけなる出で来てうち招く。白き扇  
 のいたうこがしたるを、これよおきて参らせよ。枝もなさ  
 けなけなめる花をとて、とらせたれば、門あけて惟光の朝  
 臣の出できたるして奉らす。……

東山にて、源氏君始めて紫の上を見る。

日もいと長きに、つれくなれば、夕くれのいたう霞みた  
 るにまぎれて、かの小柴垣のもとにたちいで玉ふ。人々は  
 歸し玉ひて、惟光ばかり御供にて、のぞきたまへは、たゞか  
 の西面にしも、持佛する奉りて、行ふ尼ありけり。簾少しあ  
 けて、花たてまつるめり。中の柱によりて、脇息の上に、經  
 を置きて、いとなやましけに誦みるたる尼君、たゞ人と見  
 えす。四十あまりにていと白くあて、瘦せられど、つらつ  
 きふくらかよ、まみの布を、髪のうちつくしけにそがれたる  
 すゑも、なかく長きよりも、こよなう今めかしきものかな  
 と、哀し見玉ふ。清けなるおとな二人ばかり、さてはこらは  
 べぞ、出で入りあそぶ中に、十ばかりにやあらむと見えて、  
 白きさぬ、山吹なごのなれたる、着て走り來たる女を、あま



た見えつることさもよ似るべうもあらず。いみじう生ま先みえて、美しけなる形なり。髪は扇をひろけたるやうよ、ゆらくとして、顔はいと赤くすりなして立てり。なにぞぞや。さらべと腹たち玉へるかとして、尼君の見あけたるよ、少しおぼえたる所あれば、子なめりと見玉ふ。雀の子を、いぬきが逃がらつる。ふせ籠の中に、こめたりつる者をとて、いと口惜しとおもへり。この居たるおとな例の心ならぬ、かかるこさをして、さいなまるよこそ、いと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとをかいらう、やうくなりつるものを、鳥なごもこそみつくれとて、立ちて行く、髪ゆるらかにいとあかく、めやすき人なめり。少納言のめのとよぞ、いふめるは、この子の後見なるべし。尼君いで、あなをさなや。

いふかひなう物し玉ふかな。おのがかく今日あすになりぬる命を、何とおぼえたらで、雀したひ玉ふ程よ、罪うるまどと常にきこゆるを、心憂くとて、此方ちかたやといへば、ついで居たり。つらつきいとらうたけにて、眉のわたりうちけぶり、いわけなく、かいやりたる額つき、かんざといみじうつくし。ねびをかむ様ゆかき人かなと、目とまり玉ふ。さるは、限なう心を盡くと聞こゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるよなりけりと思ふにも、涙ぞおつる。尼君、髪をかき撫でつよ、けづるをもうるさがり玉へて、をかしの御髪みづみや。いとはかなうものし玉ふこそ、哀にうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかよらぬ人もあるものを、故姫君は、十二にて殿に後れ玉ひと程、いみじう、ものは思ひ



ありたまへりしぞかし。只今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせんとすらむとて、いみとう泣くを見玉ふも、すゝろに悲し。幼心地チヤチヤよも、さすがにうちまもりて、ふらめになりて、うつぶしたるに、こぼれかよりたる髪つやくとめでたうみゆ。

おひたしんありかも知らぬ若草を、

おくらす露ぞ消えんそらなき。

また、おたるおとなげよとうちなきて、

はつ草のおひゆく末もしらぬまよ、

いかでか露の消えんとすらん。

と聞ゆる程に、僧都あなたより来て、此方へあらはしや侍らむ、今日しも端におはしましけるかな。このかみの聖ヒコミの

方に、源氏の中將の、瘧病マラリアまなひにものしたまひけるを、たゞ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍び玉ひければ、えちり侍らで、此處に侍りながら、御とぶらひにも、まうでざりけりとの玉へバ、あないみじや。いとあやとささまを、人やみつらむと、簾おろしつ。此世にのしり玉ふ光源氏、かゝるついでに見奉り玉はんや。世をすてたる法師の心地よも、いみじう、世の憂ウレとすれ、齡トシのふる人の御ありさまあり。いで、御消息ミヨシバシきこえむとて、立つ音すれば、かへり玉ひぬ、

月夜彈琴

のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわたれるも、住なれ玉ひと故郷の池水に、思ひまがへられ玉ふよ、いはん方なく戀コイとさきと、いつかたともなく、行ユクなき心地と



玉ひて、たゞ目の前にみやらるゝは、淡路島なりけり。あは  
と遙かになごの玉ひて、

あへとみるあへぢの島のあはれさへ、

のこるくまなく澄める夜の月。

ひさしう手もふれ玉はぬ琴を、ふくろよりとり出玉ひて、  
はかなく搔きならし玉へる御さまを、見たてまつる人も、  
やまからき哀に悲しう忍びあへり。廣陵といふ手を、ある  
限りひきすまじ玉へるよ、かの岡部の家も、松のひゞき、浪  
の音にあひて、心バせあるわかき人は、身にこゑて思ふべ  
か、めり。何とも聽きわくまじき、このもかのもの、いはふる  
人ごもよ、すゞろはしくて、濱風をひきありく。入道もえ堪  
へて供養、ほうたゆみて、いそぎ参れり。

野分のあした

中宮のおまへに、秋の花をうゑさせ玉へること、つねの年  
よりも見所多く、色草を盡くして、由あるくろ木、赤木のま  
せを結ひませつゝ、おなじき花の、枝ざしすがた、あさ露の  
光りも、よのつねならず、玉かとかゞやきて、つくりこたせ  
る野邊の色を見るに、はた、春の山も忘られて、涼しう面白  
く、こゝろもあくがるゝやうなり。春秋のあらそひに、昔よ  
り秋に心よする人は、かぎまさりけるを、なたゝる春のお  
まへの花園よ、心よせし人々、またひきかへしうつらふ氣  
色、世のありさまよ似たり。これを、御覽じつきて、里居し玉  
ふ程、御あそびあそもあらまほしけれと、八月の、故前坊の  
御忌月なれば、心もとなくおほしつゝ、あけくるゝよ、この



花の色まさる景色をも御らむるよ、野分例の年より  
 もおどろくしく、空の色かはりて吹きいづ。花ごもの  
 ほるよを、いとさし思ひたまぬ人たよ、あなわりなど思  
 ひさのがるよを、まして、草むらの露の玉の緒、乱るよまよ  
 よ、御こよろまさひもぬべく、おぼしたり「覆ふばかりの  
 袖」の、秋の空にしもこそほしけなりけれ。暮れ行くまよに  
 物も見えず吹きまがひして、いとむくつけよれば、み格子  
 おどまりぬるに、うしろめたく、いみじと、花の上を覺し  
 歎く。南のおとゞにも、前裁つくろひせ玉ひけるをりにし  
 も、かく吹き出て、本あらの小萩はしたなくまちえたる風  
 のけしきなり。おれかへり、露もとまるまじう吹きちらす  
 を、すこし端ちかうて見玉ふ。おとゞの、姫君の御方におひ

します程よ、中將の君まわり玉ひて、東のわた殿の小障子  
 のかみより、妻戸の明きたるひまを、何心もなく見入れ玉  
 へるに、女房あまた見ゆれば、たちとまりて、音もせでみる。  
 御屏風も、風のいたう吹きければ、押疊みよせたるに、見通  
 しあらむなるひさしの御まじに、る玉へる人、ものによまぎ  
 るべくもあらず。氣高く清らに、さと、うちにはふ心地して、  
 春の曙の霞のまより、おもしろきかは櫻の、咲きみたれた  
 るをみる心地す。あぢきなく、と奉る我顔にも、うつりくる  
 やうに、愛敬の匂ひたり。またなくめづらしき人の御さま  
 なり。とすの吹きあけらるよを、人々おさへて、如何にいた  
 るにかあらむ。うちわらひ玉へる、いといと見ゆ。花ご  
 もをこよろ、くるしがりて、得えずてよいりたまひき。御前



なる人々も、さま／＼よものきよけなる姿ともい、こわた  
 さるれど、目うつるべくもあらず。おとゞのいとけさほく。  
 はるかよもてなむ玉へるい、かくとるたゞに得思ふま  
 下き御有様を、いたり深き御心にて、若くかよるともやど、  
 おやすなりけりとおもふに、けはひおそろしくて、たちさ  
 るにぞ、西の御方より、うちの御障子ひき開けて渡り玉ふ。  
 いとうたてあいたゞしき風なめり。とかうとおろしてよ、  
 をのこどもあるらむを、あらいにこそあれと聞え玉ふ  
 を、又よりて見れば、物聞えて、おとゞもほよゑみてぞみた  
 て奉り玉ふ。親ともおやえず、若く清らよなまめきて、いみ  
 じき御かたちのさかりなり。女もねびとよのひ、あかぬと  
 なき御さまどもなるをみるに、身に染むばかりおやゆれ

と、この渡殿の東の格子もふきはなちて、たてる所のあら  
 はになれば、おそろしくてたち退きぬ。今参るやうに、うち  
 聲つくりて、簀子の方にあゆと出で玉へれば、さればよ。あ  
 らいなり、つらむとて、かの妻戸のあきたりけるよと、今ぞ  
 み咎め玉ふ。年頃、かよる事の露なかりつるを、風こそけに  
 巖も吹きあけつべき物なりけれ。さばかりの御心どもを  
 さわがして、珍らしくうれしきめを、とつるかなと覺ゆ。



## 第四章 日記及び紀行の文。

平安の朝の散文にて、物語につぎて見るべき者は、日記及び紀行の文なり。日記は、著者が日々の出来事を記録したるものにして、紀行は、旅行の際に起りたる事件、途次、於て見聞したる事物を叙べたるものなり。日記にありては、紫式部日記、最も價值あるものにして、蜻蛉日記、和泉式部日記、讃岐典侍日記等、亦觀るべし。紀行には、土佐日記、其首位を占め、更科「いほぬし」等の日記之、次ぐ。然れども、土佐日記の如きは、日記と稱して紀行なり。又、後に云ふ方丈記の如きは、日記ありといへども、大に隨筆の如き有様ありて、三者の間に、劃然たる區域を設くるを難し。

日記も紀行も、其目的は殆んど物語と同しく、實用に供する

よりは、寧ろ、娛樂の爲めよかきたるものなり。然れども、何れも、當時の人の、當時の事件を記したるものなれば、歴史家が参考として、甚だ益あるものとす。其文章の巧なるは、また言を待たざるなり。

紫式部日記の、式部が夫藤原宣孝よおくれて、寡居せし後の記録なり。其上東門院に奉仕せしありさま、御堂關白道長に懸想せられしを、心には憤れども、道長は門院の父なれば、さすがに色を正しくし、聲を勵まして、拒むもならず、婉曲に之を辭して、其貞操を全うせしさまより、日本紀局の稱を得ること等、余輩が式部の傳記につきての智識は、多く此一部の日記に由る。その文章は、概して優美なりといへども、鎮密にして莊麗なるは、則ち源語に劣るが如し。これ、がれは意匠を



凝らしし物語にして、これはさまで經營せきして、事實をかきつけし日記なればなるべし。されば、敬語少く潤色薄く、其思ひのまゝに筆を下して、毫も苦心斧削の痕を見せ、輕快にして簡淨なるは、却りて源語の上に出で、巧過相償ふに足るべし。

蜻蛉日記は、右大將道綱の母、東三條攝政兼家が室の記録なり。兼家いまた微なりしとき、此女に通ひはじめてより、道綱を生みし前後の事をしるしたれば、村上、冷泉、圓融の三朝に亘れる代の、風俗を見るに足るべきものなり。此書の名は、卷中に「かく年月はつめれど、おもうやうにもあらぬ身をこなけくは、こそ改まるもよろこばしからず、尙ものはかなきを思へば、有るかなまきかの心地する、かけろふの日記といふべ

し」といへるに基きたれば、蜻蛉の文字を用ふるは、蓋し唯、其訓の同トきにとれるなるべし。其文体は、日記の中にて稍異なれるものなり。たゞ年月の下に、其出來事を繋ぐることならず、まゝ隨筆に似たる處あるが如し。和泉式部日記(又和泉語とも)も、また主として、冷泉天皇の皇子敦道親王が、式部の許へ通ひ王ひと顛末を記せるものなり。讚岐典侍日記に、堀河天皇の御惱より、次で崩御ありしこと、明年後鳥羽天皇の御即位より、次で大嘗會を行はせられし事を録せるは、日記中、最も類ひなきものにして、歴史法制を學ぶものの参考となる事多し。文章も甚だ巧となり。更科日記亦見るべし。これは、菅公六世の孫、菅原孝標の女の日記にして、後冷泉天皇時代のものなり。



紀行の第一なる土佐日記は、紀貫之が土佐守となり、任所に在ると五年、承平四年に任滿ちて、京に還りし時の紀行なり。當時紀行日録の類、殊に男子の文は皆漢文にして、假名文は女の専ら用ふるのとなりしかば、貫之の此紀行は、ことさらに他の婦人の筆したるものゝ如く、開卷第一に「男のすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり」と書きたり。

貫之は歌仙と稱せられ、文章も亦巧となり。土佐日記の前にも古今和歌集序、大井川行幸和歌序(共に後に出づ)等の作ありしが、日記はこれらの序文の如く、浮華なる嫌なく、其長ずる處は輕妙にして、文字の上に痛心經營の痕跡を留めざるに在り。土佐の國府より京都まで凡そ百里、遠からざるにあらざれ

ども之が旅に五十日を費し、途中海賊の難を恐れしと云ふ、當時の状態目の前に見る心地する中に、處々滑稽諧謔の文句を挿めるは、最も出色なりと覺ゆ。須磨記と松島日記と、一は菅公の撰といひ、一は清少納言の作といふ。其文章は古風なれども、共に假托の書なること、世既に定論あり。

土御門殿の秋のけはひ(紫式部日記)

秋のけはひ(寛弘五年)の立つまゝに、土御門殿のあそびさへ云はん方なくをかじ。池のわさその梢ども、やそ水の邊の草むら、おれがまゝ色づきわたまつゝ、大方のそらも艶なるに持てはやさきて、ふどんの御讀經の聲に、あはれまさをけ



り。やうく、涼しき風のけしきにも、れいの絶せぬ水の音なん、夜もすがら聞き通はさる。御前にも、近う侍ふ人々はかなれ物語をするを、聞こしめしつゝ、惱まじうおはします可か、めるを、さぞ氣なく、持てかくさせ玉へり。御有様なごの、いとさらあることなれど、浮世のなぐさめには、ある御前をこそ、尋ね参るべりけれと、うつし心を引きたるへ、たとへなく、萬忘るゝにも、かつはあやしき……

稚兒の愛(全上)

十四日まで、御帳出でさせ玉はず。西のそはなるれまじに、夜も晝も侍ふ。殿の、夜中にも曉にも、まるり玉ひつゝ、おん乳母の懷を、ひきささせ玉ふに、打ちつけて寝る時などは、何心もなくおぼれて、驚くもいとくををしく

見ゆ。心元なき御不意を、我が心をやりて、ささけうりくしと玉ふも、ことわりよめでと。或るときは、わをなき行はりけ玉へるを、御紐ひれ解れて、御几帳の後にて、あぶらせ玉ふ。あはれ此宮の御志とに濡るゝは、嬉しきわざりな。此の濡きさる煨るこそ、思ふやうなる心地すれと、喜ばせたまふ……

すまものの(同上)

(上略)源氏の物語、御前にあると、殿の御覽トて、きいのすゞろととせも、いぞ來さる次に、梅の枝に、しりれたる紙に、書かせたまへる、

すまものと名にし立てれば見る人の、

折らで過くるをあらとぞ思ふ。



賜はせられたる、

人にまごをられぬものを誰れかこの、

すきものぞとち口ならしけん。

めざましうと聞こゆ。渡殿にねたる夜、戸をたたく人あり  
と聞けど、恐ろしさに、音もせで、明りしたる、つとめて、

夜もすぶら水鶏よりけまなくくぞ、

槇の戸口にたたくきわびつる。

返し

さゝならト戸バウリたたく水鶏ゆゑ、

明けては如何よくや一からまじ。

かをる香(和泉式部日記)

夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつゝ、明かき暮らす  
程に、はかしくて、四月十月あまりまも成りぬれば、木の下、  
くらがりもて行く。はたの方を眺むれば、築地の上の草の、  
青やかなるも、ことに人は目とゞめぬを、哀に眺むるほど  
に、近き透垣のもとに、人のけはいのすれば、誰にかと思ふ  
ほそに、さし出でたるを見れば、故宮に侍ひしことねり童  
なりけり。哀に物を思ふ程に來たれば、なごか、いと久しう、  
見えざりつる、遠さかる昔の名残にはとおもふをなご、い  
はすれば、其の事とさふらはで、馴くしきやうにやと、  
つゝまじう候ふうち、日比山寺に、まかりありき侍るに  
なん、いと便なく、徒然にさふらへしかば、御(二本あり)かはりし、見参



らせんとて、帥の宮になん参りて侍りしと語れば、いと善  
き事にこそあなれ。其の宮は、いとあてに、けちかうおはし  
ますなるは、昔のやうには、得しもあらトなど云へば、然お  
はしませど、いとけ近うおはしませして、常に参るやと問は  
せ玉ふ。参り侍りと、申し侍りつれば、これ持て参り、如何見  
玉ふと、参らせよとて、橘を取り出でたれば、昔の人のと云  
はれて、参りなん。いかゞきこえさせんといへば、言葉に聞  
こえさせんも、片腹いたうて、なにかは、仇々しくもきこえ  
させ玉はざる。はるなき事もと思ひて、  
かほる香によそふるよりはほとよぎす、

聞かばやおなじこえやしたると。

さしいでたり。また、はしにおはしませしける程に、かの童か

くれの方に、景色はみありけは、かくれの方にて、御覽トつ  
けて、如何にぞと問はせ玉ふに、御文をさしいでたれば、御  
らんじて、

同じ枝よ鳴きつゝをりしほとよぎす、

聲はかはらぬものと知らなん。

と書かせ玉ひて、童よ賜はらまどて、かよる事人にいふな。  
すきがまじきことのやうなりとて、入らせ玉ひぬ……

石山寺の眺臨(蜻蛉日記)

(略上)石山に、十日ばかりと思ひたつ。(略中)申時の終ばかりに、寺  
の中は着きぬ。ゆゑに物なごじきたりければ、行きて臥し



ぬ。心地せん方しらず、苦しきまゝにふく轉び、うる氣なく、夜になりて湯なごものして、御堂にのほる。身のあるやうを佛に申すも、涙に咽ぶ。いひもやられず。夜うち更けて、外の方を見出さしたれば、堂の高く、下は谷と見えたり。片岸に木さも生ひこりて、いとこくらかりたる。二十日の月、夜更けていと明かるけれど、木陰にもりて、所々に來るかたぞ見ゆ渡りたる。見下ろしたれば、麓もある湖は、海のと見えたり。高欄は押しかよりて、とばかりまもり居たれば、かた岸に、草の中にそよよととたるもの、怪しき聲するを、こゝ何ぞと問ひたれば、鹿のいふなりといふ。なごか、例の聲はなごかざらんと思ふ程に、さし離れたる谷の方より、いとうら若き聲は、はるかにながめなきたなり。聞く

心地空なりといへば、おろかななり。思ひ入りて行ふ心地、ものおほえてなほあれば、みやりなる山の彼方はかりに、田守のものおひたる聲、云ふかひなく情なげし、打ち呼ばひたり。なごか、うしも取り集めて、膽を碎くこと多からんと思ふに、果てはあきれてぞ居たる。さて、ぞや行ひつれば下りぬ。身弱ければゆやまあり。夜の明くるまゝに、見遣りたれば、東に風はいとのさかにて、霧立ち渡り、川の彼方は、繪は書きたるやうに見えたり。川面は、放ち馬さものあさり歩りくも、遙に見えたり、……

大湊を出帆す(土佐日記)



九日つとめて大湊より、なはのどまりをおはんとて、漕ぎいでけり。これかれたがひに、國のさかひのうちはとて、見送りにくる人あまたなるなかに、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等、みたちより出でたうびと日より、こゝかゝこゝおひくる。この人々の深きこゝろさは、この海もおとらざるべし。これより、今は漕ぎはなれてゆく。これを見おくらんとて、その人どもはおひ來けり。かくて、漕ぎゆくまにまに、海のはとりよとまれる人も、遠くなりぬ。ふねの人もみえずなりぬ。岸にもいふことあるべし。舟も思ふことあれど、かひなし。

おもひやる心は海をわたれども、ふみしなればしらすやあるらん。かくて宇多の松原を白きすと。その松のか

ず、いくそほく、いく千とせへたりとしらす。もとこと波うちよせ、枝ごとと鶴とびかふ。おもしろこと、とるよたへせして、うな人のよめる歌、

見わたせば松のうれごととすむ鶴は、千代のとちとぞ、おもふべらなるとや。この歌は、ところを見るよえまさらず。かくあるをみつゝ、こぎゆくまふく、山も海もくれ、夜ふけて西東もみえずして、てけのこと、かちどりの心にまかせつ。そのこも、ならはぬいとも心やそと。まして女は、舟底あかいらをつきあてゝ、ねをのまぞなく。かくおもへば、かちどりの舟うたうたひて、なにともおもへらす。そのうたふ歌は、

春の野にこそねをはなく。わか薄<sup>す</sup>にて、手をさるく。摘



たる菜を親や、まほるらん。とうとめや、くふらん。かへらや。  
昨夜のうなるもがな、錢こはん、そらくことをして、おきのり  
わさして、錢もめてこそ。おのれたにこそ。これならずおほ  
かれど、かゝぎ。これらを人の笑ふをきよて、海はあるれど、  
心はすこしなぎぬ。かくゆきくらして、とまりにいたりて、  
おきなひとひとり、たうめひとり、あるがなかに、こゝちあ  
こみして、ものもものしたまひで、ひそまりぬ。……

苔の下には身こそなりぬれ(更科日記)

その五月のついたちよ、姉なる人、子生とてなくなりぬ。よ  
そのことたよ、をさなくより、いとくあはれと、おもひこ

たるよ、ましていはんかたなく、あはれよかなしと、おもひ  
なけかる。母などは、皆なくなりたるかたに、あるに、かたえに  
とまりたる、をさなき人々を、左右にふせたるに、荒れたる  
板屋のひまより、月のもりきて、乳兒の顔よあさりたるが、  
いとゆゑ、くおほゆれば、袖をうちおほひて、今ひとりを  
もかきよせて、おもふぞいみじきや。そのほど過ぎて、しぞ  
くなる人のもとより、むかしの人の、必ずもとめて、たこせ  
よとありしかば、もとめしに、そのをりは、え見いでせなり  
にを、いまも人のおこせたるが、あはれにかなしきこ  
とよて、かほねたづぬる宮といふ物語を、おこせたり。まこ  
とおあはれなりや。かへりてよ、

うづもれぬかほねをなれ、たづねけん。苔の下には身



こそなりぬれ。めのとなりし人、今のなによつけてがなど、  
なくく、もとある所に、かへりわたるに、

ふるさとよかくこそ人はかへりけれ。あはれいかなる  
わかれなりけん。むかしのかたみには、いかぞとなんおも  
ふなどかきて、硯の水のこほれば、皆とぢられてとゞめつ  
といひたるあ、

かきながすあとはつらよとちてけり。なにをさすれ  
ぬかたみとかみん。といひやりたる、かへりよとよ、

なぐさむるかよもなきさの濱千鳥、なにかうき世にあ  
ともとゞめん。このめのと、墓所みて、なくく、かへりたり  
し。

のせりけん野べは煙もなかりけり。いつこそをはかた

づねてりみし。これをきよて、まよ母なりし人、

そこはかと、むりてゆかねどさきにたつ、涙ぞ道のとる  
べなりける。かほねたづぬる宮おこせたりし人、

すみなれぬ野べの笹原あとはかもなくく、いかに尋  
ねさびけん。これを見て、せうとは、その夜おくりにいきた  
りしかほ、

みよまよにもえし煙のつきにを、

いかゞたづねし野べのさよはら。



第五章 草子即ち隨筆の文。

三百十八

平安の朝にあらはれたる、雅文の雙璧とも稱せられ、源氏物語と、肩をならぶるものは、枕草紙なり。其著者を清少納言といふ。父は清原元輔とて、歌を以て著はれ、後撰和歌集撰者の一人なり。榮花物語には、清少納言を以て、三條天皇の女御淑景舎の官女とせり。枕草紙の中には、此女御の事、處々に見えたりとも、其局に奉仕せしこと、明かならず。されば、後の學者は概ね、清少納言は、一條天皇の皇后藤原定子よ仕へて、大よ寵遇をうけし人となす。當時、其盛名紫式部に下らず。其機敏よして、才情の溢るゝが如き、とばく人を驚かしたりといふ。ある雪の朝に、皇后左右を顧み給ひて、香爐峰の雪は如何と、宣ひしかば、清少納言は直ちに立ちて、御簾を捲きぬ。蓋し

白樂天の詩に「香爐峰雪撥簾看。遺愛寺鐘枕欲聽」とあるに、基きしものなり。是れ、後の世の話柄となり。又畫工の好材料となりて、普く人の知る處なり。皇后その才華を嘉し玉ひ、奏して内侍よもと、おぼされしが、たましく、後の兄藤原伊周、罪ありて流竄せらるゝ事ありしかば、果たし給はざりき。其末年の事情は詳かならざり。唯甚た零落して、陋屋に住まひしとき、年少公達の之を冷笑せしかば、清少納言は中より、駿馬の骨を買ふものあるを聞かば、やと答へしかば、笑ひしもの、慚ぢてたち去りし事を傳ふるの事。

枕草紙は、草子文の最も古く、且つ最も妙なるものとす。草子とは、草案、草稿の義なりといひ、或は、冊子の轉音なりともいふ。後世の隨筆といひ、漫筆といふもの、即ち是なり。此種の文

三百十九



學に屬する著書は甚た少し。江戸時代に至りては隨筆の見  
るべきもの多くあらはれたりと雖も其以前に、唯枕草子  
の外には吉田兼好の徒然草、鴨長明の方丈記、四季物語等あ  
るのみ。枕草紙の名は或は此書のおはりに、内大臣藤原伊周  
が皇后へ料紙をまゐらふとき、皇后は清少納言に、これよ  
何をかかまじ。上の御前（一條天皇）は史記といふ文をなん書かせ  
給へると宣ひしを、枕にこそ侍らめと答へ申しければ、さ  
はえよとて、賜はりし紙に書きしものある事を載せたるを、  
據りどころとして此名ありといひ、或は此草子は「花は云々」  
「山は云々」「よくきものは云々」と題詞を設けて書きし  
ものなるにより、さては枕草子と名づけたりと云へり。兎に  
角、枕の草子の名は後人の命せしものにして古くは清少納

言記としるせるものもありといふ。

余輩は先きに既に源氏物語の文を評論せしにより、枕の草  
子を論ずるに當りては、かれとこれとを照らし合して、雅文  
の双壁を比較するの便りとせん。此二書、一は物語にして、一  
は隨筆なれば、其体裁の異なるは論あじ。今は唯其文筆の上  
にあらはれたる差異を云はん。此紫清二女、共に當時無双の  
閨秀にして、學問の博き、氣韻の高き、互に相伯仲して、其間に  
軒輊となしがたじ。されども、其人物に至りては、一は既に前  
に云ひしごとく、溫柔貞淑にして、德行ある婦人の龜鑑なる  
がゆゑに、其文章にあらはれたるところ、自づから其風あり。  
他はあまり今様にして、内行も修まらず、且つ才學に誇ること  
と常なり。故に、式部は博學なりといへども、之をあらはさず。



一といふ文字をたに知らざるさま一たれども、少納言は男を男とも思はず。故事古語を引きて盛んに議論し、其活潑なること鬚眉男子も、しばしば後に瞠若たることあり。されば源語よりは、其性質の相似たる紫式部日記を以て、枕草子と比較するに、一方は温厚静肅の出来事多くして、格別飄然たる妙味なく、一方は逸氣奔放、奇抜なること多くして、卷を掩ふ能はさらしむ。この人物の差異、外にあらはれて即ち文章の差異となれるがごとし。

概して云はゞ隨筆の文は、多くは外より應ずるものよして時々刻々目に視、耳に聽き、胸に浮びしことを書きあつめたるものなり。故に少しく學問あり、文才あるもの、斷簡零篇を蒐むとも、尙一部の隨筆を得べし。然れども、意思深邃にし

て議論の高妙なる筆鋒の自在にして、記事の趣味ある、古來實に枕草子に及ぶものなし。華美なる平安の朝廷にて、上達部殿上人の、或は束帶、或は衣冠して、儀式たちたるまひ、或は此等の人々が、宮仕への諸姫嬪に戯れて、互に相嘲謔するさまの、ひとたび少納言の銳利なる筆に寫され、其冷評をうけたるものは、千歳の下、なほその實際を見る想ひあらしむ。其他四季のけしき、花鳥風月のさまのみならず、如何なる事物にても興あるものは、皆深く注意して寫しとりたりと見ゆ。その文体は、李義山の雜纂に倣ひたりといはるれども、之に上る事數等、其差違、啻に鶴鷹のこならざるべし。而して、其寫し取りたる事物に批評を加へて、或は冷笑し、或は譏刺し、或は賞賛嘆美したりしときの顔つきさへ、眼の前に見ら



るゝやうにして、其議論の巧となるは、その源語の、雨夜の品定め、の段に似たる處少ならず。寸鍊人を殺すの力は、即ち遙るゝに其上に出づ。

源語、枕草子、共に富麗妖艶極まりかゝといへども、特に源語は、縝密沈着するに長し。枕草子は、輕快豪放なるに長ざること、既に云ひしがごとし。後者は畢竟大抵外より應じたる文にして、筆に縁りて趣を盡す、よと多きが故に、自然と莊重を失ひ、浮巧に流るゝ憂あるがごとし。然れども、もと才華に富み、且つ氣昌んあるがゆゑ、其一氣呵成の筆鋒の鋭きこと、源語も及ばざるところ多し。且つ、怒りやすき人の言語の如く、突然と思想の途次をへ、或は、かは幾十言を費すべきところに、僅るゝに兩三語を以て、之を充たす等の奇抜なる文

法は、實に人の意表に出づるものおほし。故に、まゝ艱澁にして、解しがたきことあり。普通の省筆法は、源語其外の物語り文よりも多しといへども、枕草子のは、其獨得の長所なること疑ひなし。この差違も、一は續き物語にして、一は斷續常なき隨筆なるに由るといへ、また紫清二女の人物氣象の、全一ならざるより、起りし者居多なるべし。要するに、二女の文は、互に上なりがたく、下かりがたしといへども、強ひて之を褒貶せんとすれば、余輩は云はんとす。式部の文は、醇乎として、醇なるものなり。少納言のは、即ち大醇にして小疵ありと、是れ韓退之が、孟荀二子を評せし語なるが、余輩は之を紫清の二女にうつして、失當ならざるを覺ゆ。



枕草紙の例

三百二十六

四季の評

春はあけほの、やうくくしろくなりゆく、山ぎのすこしありりて、むらさきたちたる雲の、ほそくたなびきたる。夏はよる、月の頃のさらなり。やまは螢とびちがひたる。雨などのふるさへをり。秋は夕ぐれ、夕日はなやまさして、山ぎはいとちりくなりさる。鶺鴒のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど、とびゆくさへあられなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをり。日いろはて、風のおと、虫のねなどいとあはれなり。冬はつとめて、雪のふりさるは、いふべきにもあらず。霜などのいとしろく、又さらでも、いとさむき、火などいそまおこして、すこもてとたるもいとつきくく、ひるになりて、ぬるくゆるびもてゆけを、すびつ、火をけの火も、しろき灰がちになりぬるはわり。

木の花の評

梅のこく、もうすくも、紅梅、櫻の花、びら多きに、葉色濃きが、枝細く咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品劣りて、何となけれど、さく頃のをり。しろ、郭公のうけに、くるらむと思ふよ、いとをり。祭のかへさに、紫野のさたりちかき、怪しの家ども、おどろなる垣根などよ、いとしろく咲きたるこそ、をりしけれ。青色のうへに、白きひとへさねかづきたる、青くちはなど似る。

三百二十七



枕草紙の例

四季の評

春はあけぼの、やう／＼とろくなりぬく、山ぎのすことありりて、むらさきたちたる雲の、ほそくたなびきたる。夏はよる、月の頃のさらなり。やもなほ螢とびちがひたる。雨などのふるさへをり。秋は夕ぐれ、夕日はなやまさして、山ぎはいとちろくなりたるま、鴉のねどころへぬくと、三つ四つ二つなど、とびぬくさへあわれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをり。日いろはて、風のおと、虫のねなどいとあはれなり。冬はつとめて、雪のふりたるは、いふべきにもあらず、霜などのいとろく、又さらでも、いとさむき、火などいとまおこして、すももてとたるもいとつき／＼と、ひるになりて、ぬるくゆるびもてぬけさすびつ、火をけの火も、とろき灰がちになりぬるはわり。

木の花の評

梅のこくも、うすくも、紅梅、櫻の花、びら多きに、葉色濃さが、枝細く咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品劣りて、何となけれど、さく頃のをりしう、郭公のあけに、おくるらむと思ふま、いとをり。祭のかへさに、紫野のさたりちかき、怪しの家ども、おどろなる垣根などよ、いととろろ咲きたるこそ、をりしけれ。青色のうへに、白きひとへさねかづきたる、青くちはなど似る



よひて、いとをりし。四月のつてもり、五月の朔日などの比  
 ひ、橘のこくあをきよ、花のいと白く咲きたるに、雨のふり  
 たる、つとめてなどは、世になく、こよろあるさまにをりし。  
 花の中より、實の黄金の玉のと見えて、いとじくきはや  
 見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にもおとらず。時鳥の  
 よすがとさへおもへばにや、猶更に、いふべきにもあらず。  
 梨の花、世にすさまじく、あやこきものにして、めに近く、は  
 かなき文つけなどたにせず。あいさやうおくれたる人の  
 顔など見ては、たとへにいふも、實にその色よりして、あい  
 なくみゆるを、唐土（たうど）に限りなきものにて、文にもつくるな  
 るを、さりともあるやうあらむと、せめて見れば、花びらの  
 端に、をりしき匂ひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、帝

の御使にあひて、泣きける顔に似せて、梨花一枝春雨をお  
 びたりなどいひたるは、おほろけならじとおもふに、猶い  
 と、うめでたきとは、たぐひあらおとおや、たゞ、桐の花、  
 紫に咲きたるは、なほをりしきを、葉のひろがり様、うたて  
 あれども、又異木どもとひとしう、いふべきにあらず。唐土  
 まことく、しき名つきたる鳥の、これにとも住むらむ心  
 ことなり。まじて琴（こと）作りて、さまじくなる音の出くるな  
 ど、をりおとは世の常にいふべくや、ある。いと、うこそ  
 めでたけれ。木のさまぞにくけなれど、あふちの花、いとを  
 りし。うれはなにさまこと咲きて、りならず、五月五日よ  
 あふちをりし。



廬山雨夜艸庵中

頭中將の、そゞろなる虚言まことを聞きて、いとゞう言ひおとし、何れに、人とおもひけむなど、殿上にて、いみぢくなむのたまふときくに、はづれとけれど、眞ならばこそ、何れに、おのづから聞き直したまひてむなど、わらひてあるに、黒戸のうたへなど渡るにも、こゑなど、をりは、袖をふたぎて、露見おこせず。いみトウ憎たたまふを、とく言はず、見もいれで、すぐす。二月つこもりがた、雨いと、おろ降りて、つれくゝなるよ、御物いとにこもりて、さすがにさうくゝとくこそ、何れものや、いひにやらまゝとなむのたまふと、人々かたれど、世にあらじなど、いらへてあるに、一日もに、くらしで、まるりたれば、よるのおとよに、入らせたまひよ

けり。なけしのもとに、火ありくとりよせて、さゝ集ひて、へんをぞつく。あなうれしや。とくおはせなど、見つけていへど、すさまおきこゝちして、何れよのほりつらむと、おほえて、すびつのもとに、たれば、又そこにあつまりて、物などいふお、何がしさふらふと、いと花やりにいふ。あやしく、いつのまに、なに事のあるぞと問はすれば、主殿つらさなり、たゞこゝよ人づてならで、申すべき事なむといへば、さゝと出て問ふよ、これ頭中將のたてまつらせたまふ。御前へり言とくといふに、いみトク悪たたまふを、いなる御文ならむとおもへど、只今急ぎ見るべきにあらねば、いね、今さこえむとて、ふところひきいれて入りぬ。猶、人のものいふ聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、さらばるのあ



りつる文をたまはりて來となむおほせられつる。とくく  
といふに、あやしくいせの物語なるやと見れば、あをまう  
すやうに、いと清けに書きたまへるを、心ときめきつる  
さまにもあらざりけり。らんじやうの花の時、きんちやう  
のもとへ書きて、末はいりくくとあるを、いりくはす  
べうらむ御まへのおはたまさば、御覽せさすべきを、これ  
がすゑりしがほまたくと、きまんなに書きたらむも、  
見苦しなど思ひまはすほどもなく、せめまとはせは、たゞ  
そのおくま、すびつのきえたるすみのあるして、草のいほ  
りをたれりたづねむと、きまつけてとらせつれど、あへり  
と、いはいはで、みなねてつとめて、いとくつほねにおり  
たれば、源中將の聲して、草のいほりやあるくと、おどろお

どろむ間へは、なとて、さ、人けなきものはあらむ。玉の  
臺求めたまはまじり、いで聞えてまじといふ。あなうれ  
し。おもにありけるようへまを尋ねむと、つるものをと  
て、よべありじやう、頭中將のとのる所まで、すこし人々を  
きりぎり、六位まであつまりて、萬の人の上、むりし今ど  
たりて、いひついでに、猶このものむけ、絶え果て、の  
後こそ、さきがけえあらねむ。いひづるともやと、まて  
と、いさし何ともおもひたらず。つれなきがいとねたま  
を、今宵あしともよじとも、定めきりて、止みなむりしとて、  
みな云ひあはせたりしを、たゞいまは、みるまきとて、  
入たまひぬとて、主殿づらさきたりしを、又おひりへして、  
たゞ袖を捕へて、とうさいをさせず。こひとりもて來せは、



文を可へしとれといまおめてさばかりふる雨のさかり  
にやりたるにいとくくへりきたりこれとてさし出た  
るが、ありつる文なれば、可へしてけるうとうち見るに、あ  
はせてをめけば、あやしいかなるをぞとて、皆よりてみる  
に、いみぎ盗人かな、猶えこそすつまじけれと、見さわぎ  
て、これがもと付けてやらん。源中將つけよなどいふ。夜ふ  
くるまで、つけこづらひてなむやとに。この事、必ず語り  
傳ふべき事なりとなむさためと、いみじく、うたはら痛  
きまで、いひきりせて、御名は、今は草のいほりとなむ付け  
たるとて、いそぎ立ちたまひぬれば、いとわろき名の、末ま  
であらむころ、口をしけれといふほどに、修理亮のりみつ、  
いみじきよろこび申に、うへにやとくまるりたりつると

いへば、なぞ、つゝさ召しありともきこえぬに、何になりた  
まへるぞと問へば、いで、真にうれしき事の、よべ侍りしを、  
心もとなく、思ひあつてなむ。の、わりり面目あるをなあり  
きとて、はぢめありける事ども、中將のうたりつるおなま  
事どもをいひて、この可へりとおしたるひて、さる物あり  
とたに思はすと、頭中將のたまひに。たゞに來りしは、中  
々よりき、持て來りしたびは、如何ならむと胸つおれて、  
真にわろわらむは、せうとの爲にも、わろろるべしとおも  
ひしに、なのめさあらず、そこらの人の、ほめ感じて、せう  
とこそ聞けとの玉ひしかば、下心には、いとうれしけれと、  
さやうのかたには、更にえさふらふまとき身になむ侍る  
と申しりば、ことくはへきし知れにはあらず。唯人に



たれとて、聞あするぞとの玉ひになん、すこし口惜しませ  
うとおほえに、侍りしりと、これがもと付け試みるに、い  
ふべきやうなく、殊よ又これが返をやすべきなどいひ  
あはせ、わろき事いひては、中々よねたるべしとて、夜中  
までなむおはせし。これは身の爲めにも、人の爲めよも、さ  
て、いみじき喜びには侍らずや。つりさめしに、少將のつら  
さ得て侍らむは、何とも思ふまじくなむといへば、けに數  
多して、さるるあらんとも知らず、終たくもあまけるうな。  
これになむ胸つぶれておほゆる。この妹と兄といふを  
ば、うへまで皆あらしめし、殿上にもつゆさ名をばいはで、  
せうとよぞつけたる。物語などしてゐたるほどに、まづと  
召したれば、参りたるに、この事おほせられんとてなりけ

り。うへの渡らせ玉ひて、りたり聞えさせ玉ひて、をのこと  
も、こな扇にのきて持たるとおほせらるゝにこそ、あさま  
しう、なにのいはせける事に、とおやえし。さて後に、袖  
几帳なせどりのけて、おもひなほり玉ふめりし。

にくきもの

終ふたしと思ひて臥したるに、蚊のほそこゑよ名のりて、  
顔のもとお飛びありく、羽風さへ身のほとにあるこそ、い  
と憎くけれ。さしめく車にのりてありくもの、耳もきりぬ  
よやあらんといとにくし。わが乗りたるは、その車のぬい  
さへよくし。……のとも、いとにくし。きぬのむたにを  
どりありきて、もたぐるやうにするも。



## 第六章 歴史体の文學

既に前篇のはじめに云ひしごとく、國史は云ふは及ばず、すべて表立ちたる記録は、皆漢文のみなりしもの、わが國文學として見るべきにあらず。されば、平安朝の歴史文學は、唯、文章といひ、体裁といひ、小説に類似したる雜史あるのみ。雜史とは、榮花物語、大鏡の類をいふ。榮花物語は、前に云ひし如く、物語の名ありて、其体例もまた物語の如く、且つ其目的とするところも、また娛樂に在るべけれども、尙、當時の事實を記録したるものなることは、決して疑ひを容れず。學者或は此書に文詞の摸様を以て、其日記なるべきことを論ぜるものさへあるなり。

榮花物語、四十一卷(或ハ四卷)。その記するところは、宇多天皇の

寛平年中より、堀河天皇の寛治年中まで、凡そ二百年のあひたに亘れども、主として、御堂關白道長の榮華のさまを寫したるものなり。卷中に、(關白)の御前の榮花のまこと、開けをめぐり、後、千とせの春の露、秋の霧もたちあはれず。風も動きなくして、枝をならさねば、おろりまさり、世に有りがたぐめでたき事、優曇華の如く、水に生たる花は青き蓮、世にすぐれて匂ひたる花ならびなきがごとし。云々といへる一節を以て、其全豹を察するに足るべし。此書、全篇を四十帖よりち、一帖毎に、月の宴、花山たづぬる中納言、さまづのよるこび、見はてぬ夢、りやく藤壺、鳥部野等、小説めきたる題詞を設けたり、りやく。卷ごとに標目を立てし書き出でしは、宇津保物語にはトまるといふ。榮花の文章は、優美にして周密な



を世の人稍もすれば、榮花は名にも似ず花おくれて、いと實やうなりといふ。是れ此書は、事實を記録せしものなるが故に、只管文章よのミ、力を盡くす能はざりしに由るならん。もとより、源氏物語、枕草子などの文と、比ぶべきものに非ず。然れども、なほ何處となく秀れたる文章なること、文例を見れば、容易に知らるべし。

此書の作者、或は赤染右衛門といひ、或は藤原爲業といひ、書名も世繼物語といふをよむとせといふ。何れも信憑がたし。赤染右衛門は、大江匡衡乃妻にして、有名なる歌人なり。ある人こそ、ある書を能くすべけれど、書中赤染右衛門より後のことを記したれば、其作ならんこと、古人も疑ふところなり。爲業もまた文詞よ秀でたる人なれども、此人は、別

に大鏡(物語)世繼(世繼)に著ありて、彼是れ文章体裁の全ちあらざるあり。故に、安藤爲章、加茂真淵等は、赤染右衛門の書きし日記等を本として、後の人の書きつらねたるものならんといへり。

大鏡は、即ち爲業の著すところなり。爲業は、崇徳天皇の朝に仕へ、皇太后宮の大進となりし人なり。後、剃髪して寂然と號し、大原山に隱遁したるを、其弟、賴業、爲隆、また世を避けて、寂念、寂超と呼び、おなとおところに棲し、わづらひ、世の人、これを大原に三寂といひき。嘗て、雲林院の菩提講にて、世繼の翁と夏山繁樹なるものと、対談に擬して、上、文徳天皇より、下、後一條天皇に至るまで、十四代凡百七十六年間の、君臣の事蹟を記録したり。これを大鏡といひ、また世繼物語ともいふ。抑、



勅撰此國史は、乾燥なる事實を列記したるに過ぎざるのみならず、修飾辨護するところ多しといへども、この菩提講の物語は、少くも忌諱することなく述べたれば、當時の状態、今日眼の前に見る心地す。されば、史學の上より観るも、堂々たる國史とひとしき、價值あるものなり。その文章は、榮花物語より上ること一等なるべし。書中、事實の性質に應えて、或は輕快、或は嚴肅の筆を用ひ、或は時々滑稽諧謔の文句をも挿入したるは、和文も歴史を書くに適當なることを、能く示したるものと云ふべし。

是より先き、後冷泉、後三條、白河諸帝の御代に亘りて、宇治大納言源隆國ありて、宇治大納言物語をあらはしたり。此人、體格肥大にして、暑を恐るゝこと甚しかりしかば、夏日は常に

宇治平等院の南なる、南禪坊と云ふに在りて、其路傍に、あやしけなる茶店を設け、往來の人の貴賤を問はず、之に茶をすゝめて、何にもあれ、其聞見せるところを語らしめ、自らの障子の内にありて、その物語を書きとゞめたり。かくして多年を経し、積んで數十卷となりぬ。宇治大納言物語即ち是れなり。或は其毎條のはじめに、今の昔と書き出たせるに、より、今昔物語ともいふ。異本種々ありて、或は六十卷とし、或は廿九卷とし、一樣ならず。其部類をたつるも、或は天竺、震旦、本朝とこゝち、或は世俗、怪異、惡行、宿報、佛法、雜事の諸傳にこゝつ。其材料は、右に云ひしごとく、多くの村老野人の口より出でしものなるにより、所謂齊東野人の語多く、荒誕無稽の説、其半を占む。稍信すべきものと、全く信すべきものとの、殘



りの半を占むるならん。りく玉石混合、眞偽雜糅の書なりといへども、其眞なるもの、修史家を裨補するは勿論、其荒誕無稽なるものも、また當時人心の執迷と、想像との、如何なる程度に在りむらを知るに足り、極めて有益なるものなり。朝廷のありさま、上等社會の事など、他の書に詳しくあたるもの多しといへども、中等社會以下の、人情風俗を寫したるものは、唯、今昔物語の類あるのみ。

此書の文章は、大鏡等の前に成りしものなれども、既に平安朝の雅文より、後世の和漢混和文に、一轉する傾向をあらわしたるものなり。即ち和文にして、まゝ漢語を交へたるものなり。和文なりといへども、源氏物語枕草子等のごとく、修飾を盡くしたるものにあらず。殆んど當時の言語を、其儘寫したるものに遠らざるが故に、言詞概ね平易にして、文理暢達し、瀟洒の中に、自ら婉曲にして、風雅の趣を存したり。後の人、此物語の漏れたるを、あつめ、足らざるを補ひて、宇治拾遺物語と名づけたるものと作りき。(或は云ふ拾遺とい侍従名也)其文章は、今昔物語より、後に出で、却りて古風なり。鎌倉時代に出で、古今著聞集に、即ち此物語に倣ひしものなるべし。

今榮花物語、大鏡および今昔物語の一例を左に掲げ、以て平安朝の歴史文學の一斑を示さん。



花山天皇の風流(大鏡)



此の花山院ハ、風流者にさへこそ、おはしましけれ。(中略)また、こたち作らせ玉ひを折は、櫻の花は優なるに、枝さしのこい／＼とくてもとのやうなどもにくと梢ばかりを見るなむをかじきとて、中門より外に植ゑさせ玉へる、何よりもいみじう、おやとよりたりと、人の感じ申しき、また撫子のたねを、築地の上にまらせ玉へりければ、思ひかけず、四方にいろ／＼に、唐錦をひきかけたるやうに、咲きたりしなぞを見玉ひし、如何にめでたく侍りしかの……

菅公の左遷(全上)

昌泰四年正月廿九日、太宰権帥になられたまつりて、ながされ給ふ。このおとゞの子ども、あまたおはせしに、をんな

さんたちは、むことりしを、とこ君たちは、みな布ど／＼につけて、位どもおはせおを、それもみな、うた／＼にながされ給ひて、おなしまに、をさなくおはしけるを、とこ君をんな君たち、したひなきておはしければ、ちいさきあへなんど、おやけもゆるさしめ給ひしは、ともひあてくたり給ひしぞ。とりの御おきてきりめて、あやにくにおはしませは、この御子どもを、おなじりたにたにつかひさゞりけり。おたく／＼に、いとあなしくおやして、御まへの梅の花を御らんじて。

こちふるべに、おこせようめの花、あるじなとて、春をさするな。又、亨子の帝に聞えさせ給ふ。ながれぬくこれのみくづとなりぬとも、君しがらと



なりてとゞめよ。なき事により、くくつとせられ給ふと、か  
しくおやしなけきて、やがて山さきにて出家せしめ給  
ひてけり。その程、さかめてのなまじきことおほあり。ひてろ  
へて都とはくなるまゝに、あはれに心をそくおやされて、  
君がすむやとのこずゑをゆく、と、うくるままで、  
うへりみじうな。又播磨の國におはつきて、明石の驛と  
いふ所に、御やどりせしめ給ひて、驛の長の、いみとう思へ  
るけしきを御覽下て、つくらしめ給へる詩、いとかなし。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋。

かくて、おはしまつきて、あはれに心ほそくおほさるゝ  
ゆふべ、をちかたに、所々けふりたつを御覽じて、  
夕されば野にも山にもたつけふり、なけきよりこそも

えはトめけれ。又雲の、うきてたゞよふを御覽下ても、

山わかれとびゆく雲の、へりくる、うけ見るときぞな  
はたのまるゝ。さりともとよをねがしめされけるなるべ  
し。月のありき夜、

うまならずたゞよふ水のそこまでもきよきころは  
月ぞてらさむ。これうとくあそぼしたりうけに月日  
こそ、いでら給はめ、どこそ、あめれ。まことに、おどろく  
しきこと、さる物にて、かくやうの歌や詩などをさへ、い  
となたら、ゆゑく、いひつゞけまねふに、見まく  
人々、めもあやにあさましく、あはれにもまゆりるたり。物  
のゆゑ知りたる人なども、むけに近くるよりて、不ろめせ  
ず、見まくけしれどもを見て、いよくはへて、物をくりい



たそよりに、いひつゞくるほどぞ、まことに希有なるや。けきなみたをれでひつゞけうじゐたり。筑紫におひさまを所のみ、門もりためておひさます。大貳のるところには、かなれども、樓のうへのかはらなどの、心にもあらず御覽をやられるに、又いと近く、観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこめして、つくらせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看五色 観音寺只聽鐘聲

これハ文集の、白居易の遺愛寺鐘欵枕聽香爐峯雪撥簾看といふ詩にも、まささまにつくらしめ給へりところ、むかしの博士どもハ申けれ。又その筑紫にて、九月十日、菊花を御覽をけるついでに、いまだ京におひさまし、時、九月のこよひ、内裏にて、菊のえむありしに、このおとゞ、つくらし

め給へりける詩を、帝おしくらんを給ひて、御衣をたまはせ給へりしを、筑紫にもてくたらしめ給へりければ、御覽するに、いとゞそのをり覺召しいで、作らせ給ける。

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在茲

捧持毎日拜餘香

この詩いとろしく人々感じ申されき。この事ども、たゞちりくゝなるにもあらず。りの筑紫にて、つくりあつめさせ給へりけるを、うきあつめ、一卷とせしめ給ひて、後集となづけられたり。又をりくゝの歌、おきおらせ給へりけるを、おのづからよにちりきこえしなり、よつぎりわらう侍りし時、この事の、せめてあはれにかなしく侍りしかば、大學の衆どもの、なま不合に、いいますがりしを、問ひたづね



かたらひとりて、さるべきあふくろ、わりをやうのものと  
うとて、うち具してまかりつゝ、ならひとりて侍りしかど、  
おいのけのはなはたしきこと、みなこそわすれ侍にけ  
れ。これいたゞ、すこぶるおやえ侍るなりといへば、さく人  
々、けにくゝいとトきすまものにも、ものゝ給ひけるかな。  
今の人の、さる心ありなんや、と感じあへり。……………

生別(榮花物語)

ことし、安和二年とぞいふめるに、位にて三年にこそ  
ならせ玉ひぬれば、いかなるべき御有様に、どのと見ゆ  
させ玉ふかゝる程に、世の中に、いと怪しからぬ事をぞい  
ひいでたるや。それ、源氏の左のおとどの、式部卿の宮の

御事をおほえて、御門を傾け奉らむと、おほしさまふとい  
ふと、いできて、世にいと聞憎くゝのゝとる。いでや、さる怪  
しからぬ事あらむなど、世の人申おもふ程に、佛神の御お  
るにや、けに御心のうちにも、あるまじき御心やありけ  
む。三月廿六日に、この左大臣殿に、檢非違使打圍とて、宣命  
よとのゝとりて、帝を傾け奉らむと構ふる罪によりて、太  
宰權帥になして、流しつかひすと、いふを讀みのゝとる。  
今は、御位もなきぢやうなればとて、綱代車に乗せ奉りて  
たゞいさまるて奉れば、式部卿の宮の御心地、おほれたな  
らむにてたに、いみぢとおほさるべきに、まいて、我御事に  
よりて、出て來たる事とおほすに、せむらたなくおほされ  
て、これゆゝと出て立ちさひがせ玉ふ。北の方御むすめ、



男君たちいへば愚なる殿のうちの有様なり。おもひやるべし。昔も菅原のれとどの流され玉へるをこそ世の物語まきこしめしより。これはあさましう、いみじきめを見て、あきれ迷ひて、皆泣きさわぎ玉ふも悲し。男君たちの冠りなどし玉へるも、おくれじ後れじとまどひ玉へるも、あへて寄せ付け奉らず。たし有るがなかの弟にて、わらはなる。君の殿の御懷はなれ玉いぬぞ、なきのしりて、まどひ玉へば、事の由奏して、さばれそれはとゆるさせ玉ふを、同ト御車にてたにあらす。馬にてぞおはする。十一二ばかりまぞおいとける。たゞ今世の中に、悲しく、いみじきためしなる人の、なくなり玉ふ例の事なり。これい、いとゆるしう心うし、醍醐の帝、いみじうさかとう、かしくおいとまして、

聖の御門とさへ申しし帝の、一のみこの源氏になり玉へるぞ。うし、ゆる御有様は、世にあさましく悲しう、心うき事に、世の中の、しる。式部卿の宮、法師よりなりなましとおほせと、稚なき宮たちの、うつくしうておはします。大北の方の、世をいとしきものにおおえたるも、たゞ今は、宮ひと所の御蔭に、おくれ玉へれば、えふり捨てさせ玉はず。いみじう哀に悲しとも、世の常なり。すませ玉ふ宮のうちも、よろづよおほおしうもれたれば、おまへの池、やり水も、みくさるむせびて、心もゆるぬ様なり。さましく、に、さばかり、植え集め、つくろはせ玉ひ、お前栽植木さも、心よ任せて生ひあがり、庭も浅茅が原になりて、あはれし心細し。宮は、哀にいみじうとおおし召しながら、くら闇にてすぐさせ玉



ふにも、昔の御有様戀しう悲しうて、御直衣の袖も、絞りあへさせ玉はず。いきながら、身をりへさせ玉へるぞ、哀にたじけなき。源氏のおとゞの、有あるがなかの、弟の、女君の五つ六つばかりよおひするの、おとゞの御はらからの、十五の宮の御むきめも、おはせざりければ、迎へ取り奉り玉ひて、姫宮とて、おしづき奉り玉ひて、養ひ奉り玉ふ。それにつけても、いと哀あるもの、世の中なりけり。帥殿の、法師になり玉へりとぞ聞ゆめる。

上東門院の御ありさま (全上)

上、藤壺よ渡らせ玉へれば、御しつらひ有様の、さもこそあらね、女御(上東門院)の御有様もてなと、哀にめでたく、覺し見渡

らせ玉ふ。姫宮を、りやうに生うし立て奉らばやと、覺し召さる可し。異御方々、皆ねびと、のりらせ玉ひ、およすけさせ玉へれば、唯今此御方をば、我が御姫宮を、おしづきすゑ奉らせたまらんやうにぞ、御覽せられける。年頃の御目うつりたとへなく、哀にらうたく見奉らせ玉ふべし。うちはし渡らせ玉ふよりして、此御方の匂ひ、たゞ今ある空炷物ならねば、もとは、何くれの香のかにこそあなれ。なども、かくす何ともなく、おみりほり渡らせたまひての御移り香、異御方々にも似ず覺されけり。墓なき御櫛のはこ、硯の箱の中よりして、をかしく、めづらかなる物どもの有様に御覽おつかせ玉ひて、御厨子など御覽するに、何れか御目とゞまらぬ物あらん。弘高が歌繪書きたる草紙に、行成